
百の奇人が夜に行く あるいは現代のオフラインミーティング

伊達巻

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

百の奇人が夜を行く あるいは現代のオフラインミーティング

【Nコード】

N9173S

【作者名】

伊達巻

【あらすじ】

妄想癖のある女の子は、今日も今日とて現実逃避な自己完結を続けていた。

このままではいけないってわかってる、けど、あと一歩がなかなか踏み出せない。

お気に入りのブログの管理人アオオニさんに、淡い恋心を抱きながらオフ会へ。

そういえば、泣いた鬼は赤？ 青？ それとも、私？

ライトノベル作法研究所、pixivにも同名義で投稿しました。

PROLOGUE - 1

「お天道様、申し訳ございません」

私の一日は、偉大なる太陽系の中心に向かって頭を下げることから始まります。

特殊な太陽崇拜を信仰してるわけではありません。

もっとも適当な言葉は、畏怖、でしょうか。あるいは単純に、恐怖、かもしれません。

冴えない女子高生は仮の姿、果たしてその実態は美少女吸血鬼…

…などという誇大妄想的現実逃避をしてるわけではありません。

そう……実はイカロスの生まれ変わりなのです。

嘘です。

むしろ、そういったムーイズム（造語：世界の謎と不思議を全面的に肯定する主義）に傾倒した方がマシなのかもしれません。

灰になるわけでも、蠟の翼を溶かされたわけでもなく、ただ単に私が太陽様に顔向けできないだけですから。

青く澄み切った空を見ると、やましいことがなくとも顔を背けたくなりませんか？ 赤く暮れなずむ空を見ると、もうすぐ夜が来るとホッとしませんか？

もしこのような症状でお悩みでしたら、きっと私と似た人間かもしれません。

私と似た……。

反省します。出すぎた発言をしてしまいました。架空の話し相手に平謝りします。

もし私が政治家だったら、進退を問われるほどの失言としてマスコミに報道されること確定です。

それは「あなた、カフカの『変身』に出てくる毒虫に似てますね」と同等以上の破壊力をもった侮蔑の言葉ですから。

本当に、恥の多い生涯を送ってきました。

ともだち……小説と漫画とゲームです。アンパン男より友達が多くて嬉しいです。

いじめ……何故ありません。透明人間説が浮上してますが、教師には見えるようです。

れんあい……私のパソコンではレンアイと入力すると変愛と変換されます。嘘です。

もちろん、昼ご飯はトイレで食べます。言わずもがな……いいえ、無意識に縦読みにしてしまうところが私の根深な所以でしょう。正に便所虫です。

最近の便所虫はパソコンが使えます。

メスにしてはコンピュータの知識もある方ですが、自慢できることではありません。自慢できる相手もいないですし。

通学までのわずかな時間も無駄にせず、巡回サイトを確認しなければいけません。強迫観念じみた習慣ですが、他に時間の使いようがありません。自分磨きや恋活などという流行病に罹ったりしない点では健康優良虫です。

スリープ中のパソコンをそっと起こし、私はいの一番にあるサイトにアクセス。

『芥川龍之介の桃太郎』

私のお気に入りランキング連続一位記録を目下更新中のサイトです。

シンプルな黒い背景にTOP、PROFILE、MAIN、ONIKKI、BBSと見出しが並んでいます。

管理人はアオオニさんです。

泣いた鬼は赤だったでしょうか？ 青だったでしょうか？

いずれにしても鬼の名を冠するだけあって、メインコンテンツは

鬼や妖怪に関する民俗学的考察です。私は常連なので、もちろん熟読しました。内容はかなりディープで、読み物として大満足です。

サイトのおかげで、今では私もアマチュア京極堂です。いや、彼もそちらの方面は副業だったでしょうか？　ならアマチュアのアマチュア、ミニチュア京極堂です。

メインの更新がなかったので、ONIKKIをクリック。

鬼の日記で、オニッキ……。

凡人の私には夢想だにしないネーミングハイセンスで、一周回つてむしろダサイと感じてしまいます。アオオニさんは凄いです。

リンク先のブログは更新されていました。

アオオニさんは決まって夜中に更新するので、朝にチェックするのが吉です。

『20××年 月 日

突然だけど、鬼ごっこはいいよね！。

国民的遊戯、略して国戯と言っても過言じゃない。

あつ、ドロケイは駄目だ。あんな簡単に泥棒が脱獄できたら、法治国家日本の終焉だよ。教育上良くないので国戯として認定できないよね。

そうそう、鬼ごっここの話だったね。

あれって鬼が追いかける側だけどさ、歴史的に見たら鬼つてのは基本的に追われる存在だったんだ。迫害、って表現でもいいかもねえ？　意外かい？

ならサイトのタイトルでもある芥川龍之介の桃太郎でも読んでごらん。

確かに異形の力つてのは単体では強いかもしれないけどさ、結局ね、最後に勝つのは数なんだよこれが。民主主義つてのは最強の暴力にもなり得るんだ。社会的な少数派は滅すべし、なんてくだらない風潮は洋の東西を問わずいつの時代もあるもんだよ。

そつえば、鬼ごっこでも鬼は一人だね。

どう？ 暗示的な遊びに見えてきたりするでしょ？

なーんて、実は思いつくまま書いてるから深い意味はないけど。まあいいか、話を戻そう。いや、少しごっこ遊びから外れるか。

…… 鬼の話をしよう。

鬼は「おぬ（隠）」が語源だという説は、もちろん知ってるよね。え？ 知らない？ なら今すぐトップに戻ってメインコンテンツから読み直しだ！

というわけで、まあ、語源の真偽はひとまず保留するにしても、鬼は人里離れてひっそり暮らしてた気の弱い奴らだったんだ。

ある者は謂れなき虐待を受け鬼になり、ある者は自ら孤独を望み鬼になり、ある者は愛する者を殺され鬼になり、またある者はなんとなく理由もなしに鬼になった。

共通点は、鬼は独りぼっちで生まれるんだ。

正確には、独りぼっちだから鬼になるんだ。

独りぼっちってのは怖いもんだよ、内にも外にもね。独りぼっちで生きるのはとても心細い、それはわかるでしょ？ だけど、独りぼっちの存在は周囲の大多数の目から見ても、やっぱり怖いんだ。

だって、わからないんだから。

暗闇を恐れるのが本能なら、鬼を恐れるのもまた本能かもしれないね。わからない、怖い、わからない…… 典型的な悪循環だ。

そのことを忘れちゃいけないよ。たまに被害妄想な鬼が、忘れちゃうんだよね。

どっかの山を拠点にした悪名高い鬼だって、ただの偏屈の人嫌いだったのかもしれない。

現代風に意識すると、

「どうして俺のこと怖がるんだッ！ いったい俺が何をしたッ！ 引き籠もってるだけで誰にも迷惑かけてねえだろゴラァ！」

ってな具合で。

悲しいことに、ってアオオオの僕が言うのもおかしいけどさ、現

代にも鬼がいつぱいいるよ。鬼と人間の狭間で悩んでる半人半鬼も勘定に入れると、それはもう結構な数になるだろうね。

いいかい。

人はね、一人では生きていけないんだ。

一人だと、いずれ鬼になる。心を忘れ、ヒトを忘れ、異形の鬼になる。

人という漢字はお互いが支え合ってるとか、誰かが誰かに寄りかかってラクしてるとか、いろんな言い方があるけどさ、少なくとも自分以外の存在が必要なんだ。

家族でも友人でも恋人でも、誰でもいい。

よく「我思う、ゆえに我在り」なんて知ったか顔で言うけどさ、僕に言わせれば「我思う、ゆえに我思う」でしかないんだよ。一人つきりじゃ、人間は「在り」えないんだ。一人だと、ただの鬼だ。おつと、いけないいけない。鬼ごつこの話から随分とまあ話が逸れちゃったね。僕も珍しく饒舌になっちゃったよ。いや饒筆かな？ こういうのもブログの醍醐味だから、敢えて訂正しないでアップするけどね。

つて、ここでいきなり重大発表！

なんとつ、オフ会をすることになりました！

詳細は…… BBSで！

どこまでも君の友達、アオオ二より』

PROLOGUE - 2

一気に読み終えてしまいました。

今更ながら、ブログを読んで気づいたことがあります。

私は、吸血鬼でもイカロスの生まれ変わりでも便所虫でもありませんでした。

……鬼だったようです。

ごくごく簡単に言ってしまうえば、私は独りぼつちなのです。全国ぼつち女子高校生選手権があつたとしたら、少なくとも県代表に選ばれる自信があります。我思うループ（造語：妄想女の自己完結的世界観のこと）に陥ってるのです。

それを鬼と呼ぶなら、私はどこに出ても恥ずかしくない鬼でしょう。

アオオニさんのサイトがお気に入りなのは、至極当然のことかもしれません。身近に鬼がない私にとって、唯一の鬼仲間なのですから。

自分の正体が判明したことのほかに、もう一つ重大なことがあります。

最後から三行目のとある三文字に強く目が引きつけられたのです。オフ会……つまりオフラインで会うということです。当たり前です。少し混乱しています。なぜ混乱してるのかわからず、混乱に拍車がかかります。くらくらしませ。急性貧血症かもしれません。チユパブラにやられた可能性も否定できません。ミステロン説も有力です。

なにより情報が必要です。

バックスペースキーを叩きトップに戻りBBSをクリック。しようと思ってPROFILEをクリックしてしまいました。混乱して思い通りのコマンドが選べません。

アオオニさんの簡単なプロフィールが載っています。

年齢、永遠の十七歳とあります。

私と同じです。

といっても成長中の十七歳ですので、半年後に追い越しますけど。法律上いろいろと損な年齢です。アオオニさんの実年齢は十七歳以上と予想してますが、むしろ少し年上くらいが好ましいです。

どういった意味で好ましいか、あえて不問とします。

好きな本、映画、音楽。

私と同じです。

アンチ王道な作品ばかりで、密林の感想さえ見当たらないマイナ揃いです。

このサイトで知って、どうにかネットオークションで取り寄せました。そして偶然、同じものが好きになったのです。アオオニさんが好きな作品だから、という先入観があったのではなく、偶然なのです。問題ありません。

たとえ問題があっても、鶏が好きか卵が好きかの些細な問題です。私は卵が好きです。いろいろと微妙に違う気がありますが、混乱するので仕方ないです。

どうしてこんなに混乱してるか臆気ながらわかってます。

けど、わからないフリです。

顔が赤くなってる気がしますが無視します。さすが鬼です。鬼のなかでも、赤鬼です。独りぼっちの、赤鬼です。なぜだか、涙が出そうになります。

思い出しました……。

泣いたのは赤鬼です。

時刻を確認すると、家を出るまで時間がありません。他の巡回サイトは夕方以降に回すとして、何よりもオフ会の詳細を確認しなければなりません。

今度こそ、BBSをクリック。

投稿者アオオニの新作記事を見つけました。

『件名：オフ会告知！

来る20××年月日にオフ会をすることになりましたー！
ブログにも書いた通り、現代にも鬼は結構いると思うんだ。むしろ考えようによっちゃ増えてるかもね。それも一つのライフスタイルかもしれないけど。

苦しんでる鬼もいるんじゃないかな？ 隠れて泣いてる鬼もいるんじゃないかな？

僕はね、今も昔も泣く鬼には甘いんだ。
やり方を間違えたときもあったけど、それもまあ、いい思い出かな。

現代っ子のアオオニは、インターネットで同志を集めてオフ会を開くことにしたんだ。

題して『百奇夜行』オフ会！

参加資格は、自分が鬼、あるいは半人半鬼くらいかも、っていう自覚があればオーケー。

活動内容は、名前の通り夜の散歩ってところ。

あえて百鬼夜行じゃなくて百奇夜行にしたのは、現代の感覚に合わせたかったからだよ。法治国家日本で、鬼が夜中徘徊してたら警察沙汰だろ？ だから、ネットのオフ会で奇人変人が集まって夜の散歩をするってスタンスなんだ。これなら、職質も怖くない！ …

…よね！ …………ね？

書いてるうちにちよつと自信が揺らいできたけど、なんとかなさ。

集合時間は、ちよつと早いけど零時ちようどにしよう。あれ？

すると日付がずれるのかな？ こういうのって伝えにくいよね。うーん、じゃあ20××年月日二十三時五十九分にしよう。これなら間違いない。

集合場所は鬼々骨駅だ。

やっぱ名前の印象は大事だからね。オフ会のネーミングだって、奇人と鬼人をかけてるわけだよ。言霊っていうのは、もちろん知っ

てるよね。え？ 知らない？ なら今すぐトップに戻ってメインコンテンツから読み直しだ！

というわけで、鬼仲間に会えることを楽しみにしてるよ。

どこまでも君の友達、アオオ二より』

幸い、鬼々骨は地元からそう離れていませんが……。

私は必死に夜中外出するための口実を考えながら、今日のところは日課である巡回サイトのチェックを諦めることにしました。

オフ会は、今夜だからです。

「ふうー」

腕時計の針に息を吹きかけても、当然のことながら時計の針は速くなりませんでした。

どうも、授業に身が入りません。

学校は嫌いですが、退屈で平凡な授業は嫌いではありません。

テスト前になってもノートを借りる友人がいないから、という消極的な理由で積極的に授業を受ける必要があることも否めません。

今日の授業範囲がテストで出ないことを祈るのみです。

チョークが黒板を打つ音と、時計が秒針を打つ音と、雑談中の同級生が相槌を打つ音を聞きながら、私は自分だけの世界に没頭していきます。

すると、教室の中に個室が生まれます。

自我を強化し世界と隔絶した絶対空間……と中二病っぽく表現もできます。リアルATフィールドです。逃げていいのです、この個室に。

どうしてでしょう、いつもより愉快です。

この孤独が、私が鬼だということの証明だからでしょうか。そう、私は鬼なのです。フヒヒ、と笑いたい気分です。

どうしてこんなに浮かれてるのか、冷静な自分が答えを出しました。

簡単です。

鬼であること、孤独であること、とても威張れないことを誇りに思う理由なんて。

ただ、アオオニさんとの共通点が増えるのが嬉しいだけなんです。と、喜んでるばかりじゃいけません。

オフ会まで時間がないのですから。

そもそも告知したその日に決行なんて、非常識です。

常識的なオフ会がどれくらいまえから告知するのか、私は未経験者なので比較できません。それでも当日はありえませんが、たぶん。

私は……もちろん行きます。

幸い、親の了承は朝のうちに得ることができました。口から出任せですが、友達の家に泊まりに行くことになったと告げたのです。もし本当だったら前代未聞です。空前絶後です。夢にも思わないとはこのことです。

友達がいないのに、どうして友達の家にお泊まりができました。流石に親に疑われるかと思いましたが、杞憂でした。急な話でしたし、どもりながら伝えたのに、なお私の話を信じたのです。父親も母親も、特に突っ込んだ質問はしませんでした。オレオレ詐欺には気をつけるよう、あとで言うつもりです。

さらに、

「おまえにも、とうとう仲のいい友達ができたんだな」

と失礼極まりないことを言いながら……涙を流したのです。

たかが友達の家にお泊まりだと伝えただけで、朝っぱらから泣いたのです。

嘘なのに……。

とても、悪いことをした気分になりました。

小学校のとき食べきれなかった給食のパンをポケットに隠したことを忘れ、そのまま洗濯機に入れてしまったとき以来の罪悪感です。私が思っていた以上に、普段の生活態度から親には心配をかけていたのでしょうか。無知ゆえに罪悪感がなかっただけで、悠々と自分の世界で誰にも迷惑をかけず生きてるつもりで、両親には見えない傷を日々刻んでいたことに思い至りました。

友達の家に泊まると嘘をついたときの、嬉しそうなホッとしたような親の顔を思い出します。

さっきまで浮かれていたのに、急に気分が沈んでしまいました。

本当に、人でなしです。

鬼ですから、人でなしなのは当たり前じゃないですか。

陽気な自分がオニツコジョーク（造語：鬼しか笑えない冗談）を思いついたので、この話は終わりにします。

今夜は、オフ会なのですから。

普段からやや夜型の生活をしてる私ですが、深夜以降の活動は前提としてません。

体力がある方だとは冗談でも言えませんから、温存する必要があります。

最も効果的に英気を養うことができ、さらに鬼である罪深さに自己嫌悪することもない手段が一つあります。

初めてです。大冒険です。ちよっぴり不良です。

私は、授業中に居眠りすることにしました。

チャイムの音が目覚まし代わりという人生初の経験をしてしまいました。

ワルです。超ワルです。これぞ鬼という感じでしょいか。

授業中の居眠りは普段よりスツキリできると漫画かアニメの登場人物が言っていました。私には当てはまりませんでした。机に伏すような形で寝て、むしろ肩がこってしまったような気すらあります。

これは仮説ですが、授業中の居眠りでスツキリできるのは授業が嫌いな人種に限られるようです。基本的に私は授業が嫌いではないので、ささやかな罪悪感と肩のこりしか得られませんでした。

まだ午前の授業が二時間も残っています。

中途半端に寝たせいで頭が痛い。これならあと二時間くらい寝られそうですが、かえって症状が悪化するかもしれません。今夜は大事なオフ会があるのに、病欠なんかしてしまったら本末転倒もいいところです。

寝るべきか寝ざるべきか、それが問題です。

あーうー、と私が萌えキャラだったら唸るところですが痛いのでしません。思いつくだけなら痛くない、はず。少なくとも痛い未遂なので執行猶予ぐらいはつくでしょう。

今は休み時間なので、休むことにしましょう。

言霊は大事です、とアオオ二さんも言っていました。

たしか、次の時間は数学です。

数学は得意です。というより、勉強自体が得意です。与えられた問題に一つの答えを当てはめていくだけで誉められるので気が楽です。

移り変わる流行に敏感になったり、相手を思っただけで気配りしたり、そういった対人スキルの方がよっぽど難しいです。

遠い未来にSF的なアンドロイドができれば、私のような人間だったらほぼ遜色なく再現可能な気がします。それくらい、私は簡単なのです。勉強ができるくらいじゃ、人間だとは言えませんが。

はて、私はどうしてこんなことを考えてるのでしょうか？

考えるべき問題は、哲学的ゾンビな話ではありません。寝るべきか寝ざるべきか、です。つつい考えすぎてしまふのが悪い癖です。問題を戻します。

最初の十分だけ様子を見て新しい範囲に入りそうなら継続して授業を受け、練習問題なら居眠ってしましましょう。一応進学校なのですが、進学校ゆえに居眠りをして黙認される傾向があることはわかっています。

私は机の上の腕枕に額をつけ、自閉的な暗闇の中に顔を埋めました。

しばしの安息。

「ねえ、赤井さん」

外界から呼びかけられてる感じがしますが、幻聴でしょう。

「大丈夫？ ゆさゆさ」

外界から揺さぶられてる感じがしますが、幻触でしょう。

というより、「ゆさゆさ」と律儀に声に出すところが幻覚の幻覚たる所以です。

「何か喋ってよー」

「あーうー」

幻覚と会話する萌えキャラがいます。私です。

とても嫌な属性ですが、遠い未来に流行るかもしれません。

「赤井さん！ 駄目、身体が冷たい……ここで寝たら死んじゃうよ！」

「ここは雪山ですかっ！」

……。
……。

.....。

三行ほど三点リーダで思考停止してしまいました。

顔を上げた先には、クラス委員長の緑川さんが驚いた顔をしています。私もきつと、いいえそれ以上に呆けた顔をしてることでしょう。

脳内一人ツツコミをしたことはあっても、他人にツツコミをしたのはこれが初めてです。魔が差しました。

これも鬼の宿命なのでしょうか。

ともあれ緑川さんの気分を害してしまったかと心配でしたが、なぜか笑顔です。

「ううん、ここは雪山じゃなくて学校だよ。だから、本当は寝ても死なないんだよ。ごめんね、変な冗談言って。面白くなかったよね、ちよつとしか」

「.....ほつとしました」

ちよつとも面白くなかったと伝えるほど、私は鬼ではありません。気分を害してなかったことについては内心ほつとしましたので、伝えておきます。

緑川さんは勉強もできクラスの委員長もやってるような絵に描いたような優等生でしたので、まさかこんな天然なキャラクターをしてるとは思いませんでした。それとも、心の中で緑川さんにグリリバとあだ名をつけた報いでしょうか。

今も何かがツボに入ったかのように、くすくす笑い始めました。

「あはは、赤井さん上手だね。」「ほつとした」と「ホット」をかけるわけだね。私が雪山ネタを振ったから、瞬時に切り返してくれたんでしょ。凄いなあ。こういうの、確か.....尿意即尿って言უნだっけ？」

「それだとただの尿漏れですっ！ この場合は当意即妙だと思います！」

人生で二度目のツツコミです。

「そのツツコミ、いいね」

と緑川さんが言ったので、今日という日はツツコミ記念日になりました。

思い出せないほど久方ぶりにクラスメイトと会話めいたやり取りをしているというのに、随分とアクロバティックな展開です。それとも、私が知らなかっただけで、昨今の若者同士の会話とはこういうものなのでしょうか。

……対人恐怖症に拍車がかかりそうです。

「うん。思ったより元気そうで安心したよ」

「むしろ無理矢理に元気を引きずり出された感じです」

「え？ 無理矢理って？ やっぱり、具合悪いの？」

「はあ、ええ……いや、まあ」

曖昧に答えながら、私はやっと緑川さんが話しかけてきた意図を察したのです。

心配されてるのです。

他人に心配されるという状況に慣れていないために、随分と気づくのに関時間がかりました。これじゃあ、緑川さんを天然と呼ぶのは憚られます。

今までこうやって声をかけられたことがなかったので、おそらくは授業中に居眠りをしたことがきっかけなのでしょう。

私みたいな地味で目立たない独りぼちの一生徒の些細な変化も見逃さないとは、イギリスの監視カメラより正確に教室内をモニタリングしています。プチ不良生徒である私の居眠りも、即座に察知されたのでしょう。

それを見てなお、クラスの委員長である緑川さんは居眠りを咎めるわけでもなく、私の体調を心配してくれたということです。

聖人に違いありません。

「うーん、曖昧な返事だな。赤井さん、やっぱり具合悪いんじゃない？ 今日は無理しないで早退しとく？ 安心して、私が先生に言っておいてあげるから。理由は……えーと、電車が遅れたからいい？」

「それは早退じゃなくて遅刻のいいわけです！」

「そつか。ごめんね、気が利かなくて。遅延証明書が必要だからばれちゃうか」

うんうんと悩み出す緑川さん。

天然に違いありません。

天然星から来た天然星人、もとい、天然聖人です。

世間的な言い方をすれば、ただの天然ないい人、なのでしょーけど。私みたいな鬼に話しかけるとは相当なものです。

「じゃあ、親戚が死んだ……っていうのは不謹慎だから、自分が死んだからお葬式で帰りますとか？」

「私は動く死体ですか！」

「はは、まさかー。赤井さんはちゃんと生きてるよ」

「言ってることが支離滅裂です！」

「……生きてる、死体？」

「真顔で酷いこと言わないで下さい！」

そんな面白いのかつまらないのかわからない、言ってしまうばくだらないやり取りを緑川さんとしてるうちに、休み時間の九割が終わってしまいました。

ひとしきり話して満足したのか、緑川さんは爽やかな顔をしています。

私は？

私は、いったいどんな顔をしているでしょうか？

もしかしたら……もしかしたらですけど、料理レシピの塩こしよう少々といった塩梅程度には、笑っているかもしれません。

鏡で今の自分の顔を見たいような、見たくないような、そんな複雑な心持ちです。

緑川さんは、ちょっと大人びた微笑を浮かべながら、満足そうに頷いています。

「うん……やっぱり、赤井さんは思ってたとおり楽しい人だね」

「……私の緑川さん像は百三十五度くらい変わってしまいました」

「ははは、じゃあ私の赤井さん像は三百六十度変わったかな」

「なんにも変わってないじゃないですか！」

「ううん、変わったよ」

緑川さんの優しいですけど有無を言わせぬ物言いに、私は驚きました。

なにか……私の心の隙間に一步踏み込んでくるような、そんな予感がします。虫の知らせがします。警報が鳴り響きます。

わかってるのです、この一線を死守するために人と関わらなかったのに……。

今の私は、無防備すぎました。

鬼であることをしばし忘れ、世界と接触しすぎました。

セルフフィールドは安居酒屋の暖簾のように易々と払われ、緑川さんはぐつと顔を近づけてきます。鼻と鼻がぶつかりそうです。よく見ると女の私から見ても女性的で端整な顔立ちをしています。

決定的な言葉は、甘い吐息とともに吐き出されました。

「だって赤井さん、いつも一人だから何考えてるのかわからなかったから。独りぼっちで、殻に閉じこもって、何も見えなかったから」

「あ……ああ………」

「なんとなくこんな人だろうな、と頭では思っているけど、実際話したことなかったでしょ？ だから、三百六十度変わった、って表現は当意即妙だと思うよ」

「緑川さん……」

「ん？ 間違ってるかな？ 独りぼっちじゃなかった？ 私の知ら

ないところで友達いたりする？　いないでしょ。教室内の人間関係は大体把握してるけど、そこに赤井さんはいないよね」

動揺、恥辱、後悔、いろいろな感情がどっと押し寄せます。

初めて、他人から言われた気がします。

独りぼっち。

お前は独りぼっちだ、と言われるのと、私は独りぼっちです、と独りごちるのは絶望的に違います。

とても自分が恥ずかしい存在だと罵られてるような気がしました。とても自分がみすばらしい存在に成り下がってしまった気がしました。

ですが、事実です。

目を背けていても事実は事実として、他人の目にそう見えていたのは否めないのです。

友達の家泊まりに行くと言ったときの、両親の泣き笑いがフラッシュバックします。

痛いです。

心というものがあるならそれを今すぐこの手で掴んでゴミ箱に捨てたいくらいに、痛いです。痛みを感じるのが脳なら、脳を摘出して下さい。お願いします。法外な料金も何とかりますから、ブラック・ジャックによろしくです。いいえ、この場合はドクターキリコでしょうか。

「赤井さん、やっぱり具合悪いんじゃない？」

ここでそれを聞くのは、酷いです。極悪です。天然聖人は仮の姿でした。

私がなにも答えられないのを察したのか、緑川さんは耳元でまくし立ててきます。

「私ね弟がいるの。年が離れてやんちゃ盛りなんだけど、可愛くてまだ小学生だからか、鬼ごっこが好きでさ、よく膝小僧を擦り剥いてくるんだ。怪我したら、かさぶたができるでしょ？　私ね、かさぶたを剥がすのが好きなの。それも綺麗に取るんじゃないって、わざ

と不器用にやって痛みが残るように。

……それが、私のコミュニケーションなの。スキを見つけて、キズを見つけて。だからかな、クラスの委員長をやっているのも。田中さん提出物は？　とか、斉藤くん宿題やった？　とか、そういった忠告はいいよね。話のきつかけが作りやすいから。ううん、私はそういう風にしか、人と接することができないのかも。

もうわかると思うけど、天然で抜けてるキャラも作ってるんだよ。その方が同性異性問わず、油断してくれるからね。自分の方が上なんだ、って相手に思わせておくのがスキを作るポイントだって、小学校に入学するまえには学習してたんだ。

だけどね、赤井さんだけは隙がなかった。

孤立してる子は、孤立してるのが隙になり得るんだけど、赤井さんは違った。

完全に他者を拒絶して、壁を作ってた……。成績が優秀だったからかな。見た目が綺麗だったからかな。完全無欠、って言葉が似合うくらい他者を必要としてなかった。

そんな赤井さんが、今日は居眠りしてたでしょ？　だから、攻めてみたの。ちよつとだけ……。怖かったけど。けど、やっぱり思ってたとおり楽しい人だった。

ねえ……。私たち、いい友達になれそうだと思わない？」

言ってることの半分以上がわかりませんでした。

特にわからないのは、冒頭からの展開と最後の一文の関係です。どこら辺にいい友達になれる根拠があるのでしょうか。是非とも国語のテストのように傍線を引いて教えてもらいたいです。

いい友達になれそう、という発言に素直な自分が嬉しがっているのも確かです。

ですが、相手が緑川さんだという点に躊躇います。

この人は、思っていたよりさらに複雑怪奇なお人柄なようです。あと、DSです。

「緑川さんは、いったいなんなんですか？」

こういった質問をついしてしまう私は、DMなのでしょうか。また強烈にまくし立てられるのでしょうか。怖いような、楽しみなような……って危ない思考になっています。

ちなみに、まだ鼻と鼻のくっつきそうなほど接近してる状態です。周囲から見たら薔薇が映ってるのでしょうか。嫌です。BLは嫌いじゃないですが、そっこのケはありません。

幸運なことに、このタイミングで休み時間を終えるチャイムが鳴りました。

すっ、と緑川さんは身体を離して、にこりと笑います。

まるで無邪気な少女のような笑みで、一言。

「私って、天然なの」

「そうですか」

緑川さんは天然じゃないようです。

結局。

その後の授業は居眠りすることができませんでした。

緑川さんの視線が気になって仕方なかったからです。犯罪抑止に一国一台は緑川さんを置いておくといいかもしれません。

昼食。

高校に入って初めてクラスメイトと一緒に食べました。

相手は緑川さんです。強引に私の腕を引っ張って半ば拉致した強引さも驚きましたが、うちの学校に中庭があり昼食時は憩いの場になっていることの方が驚きです。

そもそも中庭の存在を知らなかった私は、トイレと比ぶべくもない開放感に食欲がなくなっただけです。お天道様が眩しかったです。

「食欲ないの？」

と緑川さんに聞かれた私は、

「太陽のせいです」

と答えてしまいました。

他人からしたら意味不明な八つ当たりかもしれませんが、これが

私の本心です。殺人の動機を聞かれて太陽のせいと答えた小説がありました。主人公のムルソーは、少しばかり正直者すぎたと思います。

食欲がない理由を聞かれて、あるいは人を殺した理由を聞かれて、太陽のせいと答えるのは模範解答からずれています。ですが、仕方ありません。私もムルソーも、たぶん嘘が苦手な鬼なのです。

緑川さんは「そうだね、太陽のせいだね」と答えて、お互い黙ってちびちびとお弁当を食べました。どうやら、緑川さんも食欲がなかったようです。そして、私やムルソーと同じように正直者でした。

隙を見せなければ、緑川さんは大人しい人だということがわかりました。もちろん、私なんかと比べたらお喋りですし、実際話しかけてくれるのは緑川さんからなのですが、会話自体はあまり長く続きません。

だからこそ、積極的に相手の隙をつこうとします。

かさぶたを見つけ剥がすのが、緑川さんの戦法なのでしょう。

格闘ゲームだったらラッシュは強いけど防戦になると脆くなる典型的な攻めキャラのイメージです。残念ながら私はカウンター重視の戦法なので、緑川さんを防戦一方にするという展開にはなりません。

昼休み中ひよんな会話の折で私あまり私服をもってない話をしたので、さっそく新しい服を緑川さんが探してくれるという流れになりました。とんとん拍子に話が進みます。ずっと緑川さんのターンという感じです。

放課後。

気がつけば、私は緑川さんと一緒に駅ビルで洋服を物色していました。

「赤井さんはスタイルがいいから、何を着ても似合いそうだね。これなんかどうかな？　きつと、道行く男子の目をぬか漬けにするよ」

「私は漬け物じゃないです！　それに露出狂でもありません！」

胸元がえらく開いたヒラヒラの下着のような、キャミソールと呼ばれる布を私の身体に押しつけるようにして、緑川さんはとても楽しそうに笑っています。

「これくらい今は普通だよ。恥ずかしかったら、上に男物のトレーニングコートを羽織れば」

「余計に変態です！」

「じゃあ、このカーディガンなら可愛いよ」

「……前々から思っていたんですが、キャミソールというのは下着なんですか？ それとも、Ｔシャツみたいな上着なんですか？ 境界線があやふやです。下着風の上着なのか、上着風の下着なのか、それが問題です」

「そう言われれば、そうね……」

緑川さんも悩んでいます。やはり根が素直なようです。天然ではなく養殖のポケキャラですが、悪い人ではありません。

会話は昼休みのときより弾みます。それはもうスーパーボールのようにポンポンと弾みます。まるで自分も一緒に喋りになったように錯覚してしまいますが、きつと違うでしょう。

緑川さんがボケて、私がツツコむ。

一般的な歓談というより、むしろ漫談のように明確な役割付けがされています。

お互いにとつてそれがラクなので、私もやぶさかではありません。

「うーん、素材はいいのに赤井さんはちょっと欲がないよね」

「欲、ですか？」

「そう、欲。よく見られたいって欲がないと、お洒落なんてできないからね」

「だったら緑川さんは誰かによく見られたいんですか？」

「特定の人ってのはいないけど、私はみんなによく見られたいかな」

「あー」

納得です。

今はお互い制服なのでわかりませんが、きつと緑川さんの私服はさぞ清楚で可愛いものでしょう。居眠りを指摘されてからのわずかな交流と、私の低い人間観察力をもつてしてもわかるということです。

一言で表せば、良くも悪くも緑川さんは計算高い人という感想です。

裏を返せば、そこまで私に自分をさらけ出してくれてる、という

ことかもしれません。

「で、赤井さんはよく見られたい人とかいないの？　たとえば、好きな男の子とか」

「好きな……」

アオオ二さんの顔が思い浮かびます。

とはいえ、実際見たことなどないのでぼんやりとしたイメージですが。

ちなみにイメージ上は、すらりと背が高い痩せ形のシルエツトで、二ヒルな笑いを口元に浮かべた好青年です。年齢は私より少し高いくらいから二十代後半までと比較的範囲を広くとっています。

要は、ただの理想です。妄想です。けど……。

ちよつと考えれば年齢も性別すらもわからないというのに、なんとなくどうしようもなく、重力のように自然な成り行きでアオオ二さんに惹かれています。

「あれ？　赤井さん、顔」

「へ？」

気がつかぬうちに、私は赤鬼になっていました。

「うわあ、耳まで真っ赤だよ。もしかしてもしかして、好きな人いるの？　本当？　ええーっ、誰々教えてよ？」

「あーっー」

「……萌え？」

慣れない展開に赤鬼になった萌えキャラがいます。私です。

これだと狙いすぎの萌えになってしまいます。そんなの嫌いです。最初に話しかけられたときは寝言で済みましたが、今はしっかり覚醒中です。

自分が嫌ってる存在に自分自身がなるのは耐えられません。「お兄ちゃんダイスキ」とろくでもない主人公に好意を寄せる妹キャラは絶滅してほしいです。

このまま「あーっー」キャラが緑川さんに定着してしまったら、そついった萌えキャラの末席に名を連ねることもありえます。

それだけは、全力で阻止しなければなりません。

「フヒヒ、フヒヒヒヒ、アー、ウー、ヒヒ」

と薄笑いで自嘲しながら萌えを自重します。怪しさ抜群で萌えも吹っ飛びます。

さり気なく「あーうー」を入れることで、さっきの奇声も相殺することを忘れません。

「え、なにその笑い方……。キモ！」

「……良かったです」

これでいつもの私です。

キモいと言われてホッとする否萌えキャラの卑屈キャラです。これで萌えと呼ばれるなら、私の予想より時代が速すぎるので諦めます。

あとは、このまま話が逸れてくれることを祈る限りです。

「冗談はさておき、赤井さん誰が好きなの？」

世の中は私が思ってるより甘くありませんでした。

萌えキャラが定着するという危機は脱したものの、また一難です。いや、むしろ最初からこっちの難しかったのかもしれない。

緑川さんの一時間に及ぶ質問攻めに場慣れしていない私が対処できるはずもなく。

「……いないこともないです。むしろ……今夜会うという可能性も低くはありません」

なんとも曖昧でわかりにくいですが、顔を真っ赤にしているというオプシヨンがついてるせいもあって、私は好きな人がいることを肯定してしまいました。

さらに、詳細こそ話してませんが、今夜会うことも仄めかしました。

「じゃあさ、勝負服!？」

この場合の勝負とはどういった意味合いなのか計り兼ねますが、そのぐらいの気合いは必要なのかもしれません。

「……初勝負です」

私は赤い顔を隠すよう俯きながら、神妙に告げました。

「おおーっ！ 初勝負！」

こちらの物言いに過剰に反応してるのが気になります。緑川さんの頬も心なし朱に染まってるような……。

どうやら多大な勘違いをさせてるようですが、訂正する気力はありません。

レット・イット・ビーです。オールライトです。

「なら二人でお洒落な服選んで、今夜は盛大に清潔を散らかそう！」
「それを言うなら純潔を散らすです！ てか散らしません！」

その後は引きずられるまま為すがまま、お店をはしごしていきました。

あれよあれよと振り回されて、緑川さんに完全コーディネートされていきます。

さらに一時間後。

完成しました。

新しい私が。新しすぎる私が。

「……完璧ね、赤井さん。これなら私が惚れそうよ。惚れそうよ」

「二回も言わないで下さい」

「大事なことのよ」

緑川さん、目がちよつとマジです。

これはもしかすると、新時代の純潔の危機を迎えてるのかもしれない。

「いや、いやいやいや。緑川さんに惚れられても困ります」

「駄目だよー。ボケるのは私で、赤井さんはツツコミでしょ」

「惚れられて困ると言うのはボケなんですか!？」

「うん」

「即答なんですネ！ 私はボケとツツコミの二刀流ですか！」

「そうか、二刀流なんだ……。けど、私は大丈夫。個人的には男の人との浮気は我慢するけど、女の子との浮気は許せないかな」

「絶対に違う想像してますよね！」

もしや緑川さんは本当にそっちの人なのでしょうか。

さり気なく半歩だけ緑川さんと距離を離します。

そして、緑川さんは吸い付くように一歩前進します。

半歩分の接近を許してしまいあわあわと私が狼狽してることなど露知らず、緑川さんは私の服を満足気に眺めています。

「でも、そのスカジャン格好いいよ、うん。やっぱり赤井さんは背が高いから、こういった服も似合うねー、いいなー。これぞ勝負服って感じ。もう誰にも負けない、って背中が龍が吠えてるね」

「……緑川さんを侮っていました」

徹頭徹尾、ボケ倒しでした。

抵抗しない私も私ですが、緑川さんは養殖のボケキャラの中でも悪意のあるボケキャラということを失念していました。百合ネタもボケでしょうし、服のチョイスもまたボケなのです。小さな隙を作

るための緑川さんの戦法なのです。

私の格好を一言で表せば、前衛的、でしょうか。

上は真っ赤なスカジャン、背中に龍の刺繍付き。下はなぜか黒いゴスゴスのフリフリミニスカート。靴はウエスタン調のレザーブーツ。

統一感皆無の異文化交流ファッションです。

それでも、髪がショートで平均より高めの身長が相まって見れないこともないかもしれません。ファッションセンスなど持ち合わせていませんが、自分で選ぶよりセンスがいいでしょう……たぶん。

これはこれで……。

「あはは。充分笑わせてもらったから、ちゃんとした服買おうよ」

「とんだ笑いものです」

「大丈夫。今度は可愛くコーディネートするから」

「……いえ、これで結構です」

「へ？ 嘘でしょ？」

「本気です。一人だとこの組み合わせで買おうなんて思いません。

二人で巫山戯ながら服を選んだからこそその数奇な組み合わせです。

私はクラスメイトと洋服探するという経験が初めてなので、いい記念になります」

なるべく心の丈をわかりやすいよう語ろうとしたら、わかりにくくなってしまいました。

それに、ちよつとクサイことを言ってる気もします。恥ずかしいですが、もう気にしません。今の格好もそこそこに恥ずかしいので、免疫がついたのでしょうか。

呆気にとられたようにしばし停止した緑川さんは、ちよつと躊躇いながら一言。

「……私も、こうやって買い物したの初めて」

「そうですか」

なんとなく、わかってました。第一、はしやぎすぎです。

私と緑川さんの間に、沈黙が訪れました。

さつきまで姦しかった分、余計に静寂が際立ちます。

ここは、私何が言うべきだと妙な使命感に駆られ、自分らしくないことを口走ります。

「次は……次の機会があれば、私が緑川さんの服を選びます。それで、おあいこです」

一步、踏み込みます。

けど、おあいこ、という卑屈な表現が自分らしいです。

「そうだね」

緑川さんは、嬉しそうな恥ずかしそうな、そして同時にどうしたらいいか途方に暮れたような、そんな気まずさのない交ぜにした曖昧な笑顔で頷きました。

お互い距離感がイマイチです。

コミュニケーションがチグハグです。

私は攻めるのに慣れてないですし、緑川さんは防戦に回ると途端に大人しくなります。

「……そうだね」

緑川さんは、二度、頷きました。

大事なことから、というわけではないでしょう。その二度の頷きは次の機会を了承したのではなく、保留したのだと直感しました。まだ、お互いの世界は触れ合っていません。

まだ、私は鬼のままです。

オフ会までの時間を外で潰そうかとも思いましたが、思わぬ出費で軍資金に不安が残ります。夕食は家で食べることにしました。

「ただいま」

「おかえ……り」

はて、どうしたのでしょうか？

ちょうど玄関で鉢合わせた母親が、ツチノコを見つけたような顔をしています。

「ど、どうしたの、その格好……」

「格好……あ」

UMAは、私でした。

買った服をそのまま着込んでいたのです。

赤いスカジャン。フリフリミニスカート。やんちゃなブーツ。それに、スクールバッグ。

本来制服のはずの帰宅時の格好が、見当違いの不良の格好になっています。

それに、今日は友達の家にお泊まりに行くと言いました。

悪い男に惚れる　格好も彼の好みに　純潔を散らす　清潔を散らす
かす

最後は緑川さん流の悪ノリですが、大体こんな感じのことを思われてる恐れがあります。

きっと母親の頭の中で私は陵辱されてるはずです。いや、されていないかもしれませんが、良からぬ想像をさせるに値する格好とタイミングなのは違いありません。

言い訳をしなければ。

早急にそれっぽい言い訳を捏造します。

「バ、バンドをするんです」

「バンド!？」

「そ、そうです。ロックンロールです」

エアーギターもどきの動きで母親を威嚇します。飛び跳ねます。

マイクで歌うフリをします。気分は魅惑の深海パーティーでジョニー・B・グッドをテケテケと弾くマーティです。

「へ、へえ……そうよね。私の頃とは時代が違うのよね、ええ、わかってるわ。ええ、ええ。バンドね、いいわよね、ええ」

呪文のように「ええ」と納得しながら、母親は夕食の買い出しに向かいました。

この嘘はあとで絶対に訂正しなければ、と心に強く誓いました。

ちなみに、夕食はなぜか赤飯でした。

適当に駅前のネット喫茶で時間を潰したあと、鬼々骨駅に向かいました。

なんやかんやで巡回予定のサイトはチェックできてしまいました。ライフスタイルは変えにくいということでしょう。嬉しいのに、どこか残念です。

私は……変わりたいのでしょうか？

今日、緑川さんとたくさんお話をしました。馴れ合いというより探り合いでしたが、大きな進歩です。クラスの同級生と放課後ショッピング。まさかそんなコテコテの若者らしいイベントを経験するとは驚きです。

こんな時間に外に出るのも、考えてみれば初めてです。目的はオオニさんのオフ会。誰かに積極的に会いたい、そう強く思ったのも考えてみれば初めてです。我思うループからはみ出して、世界に興味が出てきた証でしょうか？

ぐだぐだ考えながら歩いてたら、駅に着きました。

「……おかしいです」

誰もいません。

世界に興味が出てきたかしらん、と思考を巡らせてるときに限って、世界に見放されたように独りぼっちです。

都会とはお世辞にも言えませんが、鬼々骨駅は急行も止まるそこそ大きな駅です。時刻はオフ会の約十分前、二十三時四十九分。四十九、というのが若干不吉な並びですが、終電にはまだ余裕があるはず。

灯りはあります。コンビニもドーナツ屋さんも煌々と輝いています。

それなのに、誰もいません。

オフ会の参加者らしき人が見当たらない、などという甘いもので

はありません。

言葉通り文字通り、誰もいません。

人っ子一人見当たらないなんて、初めてです。

「あのー、誰かいませんかー」

まさかこんな台詞を吐くことになるなんて。でも案外、差し迫った事態に陥ると人間の行動パターンは単純化するのもかもしれません。冷静に自己分析してる合間もきよろきよろと見渡しますが、独りぼっちです。

「すみませーん、誰かいませんかー」

ネット喫茶から出てぼんやり歩いてる間に、人類は私だけを器用に残して絶滅してしまつてのでしょうか。マヤのロングカウントカレンダーには少し早いですが、誤差の範囲なのかもしれません。

あるいは、私だけが例えば交通事故で気づかぬうちに死んでしまつたのでしょうか。浮遊霊なり地縛霊なりになつてしまい現実とは表裏一体の異世界に足を踏み入れ……。

そこで、運命的な出逢いを果たすのであつた。

次回『白馬の青鬼サマ』乞うご期待。

と、妄想を次回予告風に再現してみても状況はこれっぽちも変わりません。

状況を整理します。

私はオフ会の集合場所である鬼々骨駅にいます。急行も止まるそこそこ人が多い駅です。時刻は零時まえです。天気は晴れです。車やタクシーは止まっています。コンビニやドーナツ屋さんも営業中です。

そして、私は独りぼっちです。

こんなことがいつたい、ありえるのでしょうか？ 否、ありえませんが。否、現実にあります。否、そもそも現実ではなく小説かもしれません。否、それを言ったらおしまいです。こんな風に否定の連続で言葉遊びでもしないとやっていけません。

それほどの、異常事態です。

孤独。

よく一人で生きていけるタイプの人間もいる、と最近の中二病な作品であったりしますが……本当でしょうか？ 本当に一人なんて人間でいる限り無理な仮定です。魔法と同じです。孤独もファンタジイです。

そう、これはファンタジイです。あるいは、夢に違いありません。だって今、世界にいるのは私だけなんです。大げさな物言いですが、なぜか確信をもって言えます。

いつもいつも、学校でも家でも私は一人でいる気でいました。けど、違ったのです。私がいくら否定しても無視しても受け入れなくても、隣を向けば、あるいは声を出せば誰かが来てくれたはずです。どうせ誰かがいる。

その状況に甘んじて、孤独なフリをしていた臆病者が私だったのです。何も与えてなくせに、困ったときは何かをくれると期待していた卑怯者が私だったのです。

孤独。

この不思議な空間に迷い込んでしまって、初めて独りぼっちでいることに不安になりました。なんだか、私がいるということだって曖昧な気分になってきます。我思うループ発動です。

「誰か……誰かいませんか？」

チープな呼びかけが続けますが、人の気配はありません。

「誰かつ！」

夜の街に私の叫び声だけが虚しく響きます。

もう一度呼ばうと息を吸い込んだとき、後ろからカツンカツンと音が聞こえてきました。靴の音、のようです。誰かが近付いてきています。

安堵と不安と、淡い確信をもって振り返ります。

「やあ、こんばんは。今宵は月が綺麗だね。って言っても、別に漱石先生流の告白とかそんな大層なものじゃないよ。うん、オフ会日和ってこと」

背がひよろりと高い青年が立っていました。

白いロングTシャツに青いジーパン、というシンプルすぎる格好です。ですが極めて目を引く特徴がありました。髪が青かったのです。まるで地の色のように自然に青い髪を軽く掻き上げながら青年が近付いてきます。

年齢はぱつと見わかりませんが、いろんな意味で青年という言葉が妥当な気がします。髪青いし。イメージカラーは青、あるいはラッキーカラーが青なのでしょう。そんなベタな駄洒落のようなセンスをもってるのは、鬼の日記でONIKKIと名付けてしまう……。

「あ、あの……」

「そうです、私に変なアオオニさんです」

人懐こい笑みを浮かべた目の前の青年こそが、アオオニさんでした。

「え、えっと……」

「ん？ 何か聞いたそうな顔をしてるね。顔に書いてあるよ。いや、もちろん実際に書いてある訳じゃなくて言葉の綾だけど」

当たり前です。

顔に書いてるわけないですし、アオオ二さんに聞きたいことはあります。

こんな誰もいなくなつた世界でも飄々としてるアオオ二さんは、何か知ってるはずですよ。

「けどさ、そのまえに君の名前を教えてよ」

「な、名前……」

あまり自分の名前は好きではないのですが。

そんなことより、事態の異常性が強くて今まで失念していました、目の前にいるのはアオオ二さんなのです。名前を聞かれ、改めてその事実を認識した感じです。

歳はあまり変わらないように見えます。実年齢は外見以上に高かったとしても、それはそれで、なるほど永遠の十七歳というのは言い得て妙なかもしれません。

そして、まあ、言ってしまうえば、イケメンです。

自分は面食いの部類ではないと思っていたのですが、格好いいことに越したことはないとアオオ二さんの顔を見て思い直しました。サイトやブログの内容を見て私はアオオ二さんに惹かれたわけですから、内面を重視してると言えなくもないですが。それでも、禿げ上がった頭にズボンからお腹の肉がはみ出したオジサンが来たら少なからず失望してしまったことでしょう。

嘘です。少なからず以上の失望をしてしまったでしょう。大失望かもしれません。大失望って書くと太公望に似てますよね。ともかく。これじゃあ、声優の顔がアニメのキャラより不細工だという人

たちと同じです。結構な自己嫌悪ですが、私は正直者なので反省はしません。

「それで、名前は？」

「わ、私の名前は……あ、あか、あかい」

緊張でどもってしまい、自分の名前すら満足に言えません。

「うんうん、なるほど。あかい……赤い鬼。つまり、アカオニくんだね」

違います。

ですが、これはこれでいいでしょう。

アカオニとアオオニ。

これ以上ない組み合わせです。言霊は大事だとアオオニさんも言うてました。このネーミングは遠回りなプロポーズなのかもしれません。月が綺麗だとも言っていました。その次は、あなたのためなら死んでもいい辺りでしょうか。文学的です。

アオオニさんは人差し指で何かを数える素振りをしながら頷いてます。

「ひい、ふう、みい……。アカオニくんを含めて参加者は七人か」

「え？」

驚いて振り返ると、そこには年齢性別様々な六人がいました。いつの間に……。

さっきまで独りぼっちだったのに、急に賑やかになりました。

眼鏡をかけたやる気のなさそうな若い男。半ズボンを履いてる小学生くらいの男の子。派手な化粧で露出が激しい女。口元を歪めて笑っている肥満体型の男。ぼそぼそ独り言を喋ってる制服姿の女の子。人を羨む視線を投げながら爪を噛むスーツの中年男性。

そして……私。

七人です。侍の数が大罪の数かおたくの数かわかりませんが、とにかく七人です。

参加者にこれといった傾向はありません。無相関という相関関係がある、などと統計学者的な屁理屈くらいは言えるかもしれませんが

が。

それにしても小学生や中学生くらいの子もいるなんて、いいんでしょうか？ 親が心配したりしないのでしょうか？ 幸い、補導や職質の心配はありません。彼らが増えたところで世界は止まったままなのですから。

そうなのです。人は増えましたが、それ以外はトワイライト不思議空間が継続中です。自分の携帯番号に電話をかけたら、もう一人の私が電話に出るくらいの空間です。気になって携帯を確認してみると、案の定、お決まりのように圏外で検証しようがありませんけど。

この閉ざされた世界に七人、いいえアオオ二さんを入れて八人というのは多いのか少ないのか判断しにくいです。

急に、不安になってしまいました。

そもそも私に初対面の相手と仲良く談笑する能力なんてありません。アオオ二さんのオフ会、ということで他の参加者がいることに思い至らなかった私の失策です。

「ねーねー」

「はい？」

見ると、小学生くらいの男の子がスカジャンの袖口を引っ張つてます。買ったばかりなのですから伸ばさないでほしいです。

だからといって、子どもだからという強力な免罪符をもつ相手を邪険にすることもできず、とりあえず適当に対応します。

「ボクたち、鬼なんでしょ？」

「まあ……アオオ二さんの定義でいったら私は鬼でしょうね。君のことまでは存じ上げませんが」

「ぞんじあげませんが？ ふうん、お姉ちゃん難しい言葉使うね」

「よく言われます」

「わかりにくいね」

「よく言われます」

私は対象年齢に合わせた言葉遣いをする気など毛頭ありません。

赤ん坊相手にも普段通り話すでしょう。いないない、っていないわけありません、ちゃんといますよ！　と一人ノリツツコミをしなから赤ん坊をあやす自分の姿がありありと浮かびます。

「それでさ、ボク気になることがあるんだ。お姉ちゃん教えて」

「……答えられる範囲で答えます」

「鬼の居ぬ間に洗濯って言葉あるじゃん？　あれって、もし自分が鬼だったらどうなるの？　服、洗えないじゃん」

「それは……困りましたね」

意味が全然違います。

「どう、アカオニくん？」

アカオニさんがにやにやしながら近付いてきました。一歩ずつアカオニさんが近付くにつれ、鼓動が速くなるのを感じます。ときどき。

「アカオニくんって……もしかして、シヨタ？」

「違います！」

別の意味で一氣にマックスまで鼓動が速くなってしまいました。

確かに男性向けの諸々の中では唯一シヨタだけは嗜みますが、それとこれとは話が別です。

……別です、きつと。

「ねーねー、お兄ちゃん。シヨタって何？」

「シヨウタロー・コンプレックスの略でな、意味は」

「子どもに変なこと教えないで下さい！」

「ねーねー、お姉ちゃん。八方鬼人って言葉あるじゃん」

「なんだか凄く強そうですね！」

そうでした、今日はツツコミ記念日でした。時刻は零時過ぎで日付は跨いでますので、ツツコミ後夜祭みたいな感じでしよう。

「というわけで、シヨタコンというのは要約すれば半ズボン萌えなんだ」

「なんだか大胆に要約してますけど絶妙に違います！」

ちなみにここにいる男の子も半ズボンです。

特に萌えません。

…… 本当ですよ？

「ねーねー、お姉ちゃんはお弁当温めますか？ ってきかれたら「ああ、はい」って答えたあとで別に温めなくても良かったよー外寒いし帰ったら温め直そうかなーって後悔するタイプ？」

「そうですけど小学生くらいの男の子に言われると何故かむかつきます！」

「むうー……」

いや、急にそんな子どもらしく拗ねられても。

この男の子は緑川さん並にいい性格をしてる気がします。

「シヨタ受けっ！ シヨタ受けーっ！」

「いきなり奇声上げて誰ですかあなた！」

中学生くらいの制服姿の女の子がいきなり興奮しておかしくなりました。おそらく何かスイッチが入ってしまったのでしょうか。ピンポイントで属性にクリティカルヒットしてしまったのかもしれない。

小学生＋半ズボン＋「むうー」の三種の神器ですか。そうですか。特に「むうー」のポイントが高いな、とわかりたくないことがわかります。

「うわっ、このお姉ちゃん目がマジだよー！」

「テケリ・リッ！ テケリ・リッ！」

小学生の男の子を追いかける女子中学生の図。ラブクラフト的奇声付き。

ここが鬼の世界だと言うことをまざまざと感じさせる光景です。思わず身震いします。現実と空想はしっかりと区別しなければなりません。

「さて、そろそろ歩くとしようか」

アオオ二さんは何事もなかったかのように平然と口にしました。やはり格が違います。私も見習って、少しのことではツツコミを自重した方がいいかもしれません。オフ会の参加者以外は人が見当た

らないことなんて気にしたら負けかもしれません。

けど……。

「あ、歩くって、ど、どこに行くのですか？」

アオオニさんと対面するとツツコミ以外はどもってしまいう女子高生がいます。私です。限定的かつ全く嬉しくない特徴です。

「なーに、大地を力強く踏みしめるその二本の足があればどこにでもいけるさ。三百六十度全て道なんだよ」

「つまり行き先は決まってるんですか……」

独り言っぽくするとどもりませんでした。新たな発見ですが、これも嬉しくありません。

「行き先なんて些細な問題だよ」

チツチツチ、と人差し指をメトロノームのように揺らしながらアオオニさんが私の独り言に応えました。会話が成立したなら、独り言ではありません。初めてツツコミ以外でどもらなかった、と前向きに認識を修正します。

「アカオニくんはちゃんとこのオフ会の主旨を覚えてるか？ このオフ会は百鬼夜行、もとい百奇夜行だよ。歩くことこそが目的さ。お喋りしながら夜道を歩きみんなで親睦を深めて……自分を知らんだよ」

「自分を知らなくてもらう、じゃないんですか？」

参加者同士で親睦を深めるなら、そっちの方が適切な気がします。

「ははは、まあ、そうとも言っな。僕は昔から受動態と能動態の区別がつかない病気なんだ。例えば、お腹空いたしカレーライスに食べられよう、とか」

「とんだホラーですね！」

「僕の趣味はサッカーをされることです、とか」

「なんかイジメっぽいですね！」

受動態なのに主語を変えないからおかしくなるのです、とは面白くないからツツコミませんでした。勢いのツツコミか理屈のツツコミか、臨機応変でなければなりません。私のツツコミレベルが昨日

今日で上がりました。

何かを誤魔化された感じですが、アオオニさんと自然な会話（ボケとツツコミという明確な役割分担を自然だとすればですが）ができたので良しとしましょう。

「うわーっ！」

「テケリ・リ・シヨタ・ネクラノミコロナーっ！」

まだやってたんですね。それに叫び声が意味わからないですね。

一足早く鬼ごっこをしていたシヨタとシヨタコンを追うようにアオオニさんが、次いで他の参加者が歩き始めました。

私も後に続きます。

ふと、空を見上げました。

そこにはいつもと変わらぬ美しい月が悠然と夜空に在りました。

鬼しかいない不思議世界で、ただひとつ確かなもの。やはり、お天道様よりお月様です。月はいつもと変わらない、けれど、いつも以上に鮮烈に、私の目に映りました。

こうして、百奇夜行が始まりました。

アオオニさんのサイトを見て集まった人たちがオフラインで会したわけです。みなさん、年齢性別様々ですが、やはりミニチュア京極堂なのでしょうか。小粋な妖怪ジョークのひとつくらい考えておいても損はなさそうです。

私は、少し距離を置くようにして様子を見ています。

いつものスタイルです。いつもの距離感です。

だけど、段々と気分が悪くなってきました。正確には、苛ついているのです。

何に、誰に苛ついてるのか、わかりそうでわかりません。嘘です。

わかっていますが、わからないふりをしています。

よほど私が難しい顔をしていたのか、アオオニさんが心配そうな顔をして近寄ってきました。

「どうしたんだい、アカオニくん？ それじゃあ、まるつきり鬼じゃないか」

「はあ……まあ……」

鬼じゃないか、ってアオオニさんに言われました。

飄々としたアオオニさんのおかげで、私も毒気を抜かれました。ちよつと、考えすぎてしまったようです。

どちらかと言わなくても社交的に見えるアオオニさんですが、やはり私とあるいは私たちと同じように鬼なのでしょうか。独りぼっちと感じてるのでしょうか。よくわかりません。

「お前に言われたくないよ、って顔してるねアカオニくん。まあ僕は鬼だけださ。けれど、アカオニくんはよくて半人半鬼ってところだよ」

「そう、でしょうか？」

「そうだよ。僕が鬼だからこそ、断言できる」
断言されました。

私は鬼なのでしょうか？ 人なののでしょうか？
よく、わかりません。

独りぼっちだと思っていました。

独りぼっちで、人でなしの鬼だと思っていました。

ふいに、友達の家に泊まりに行くと言えたときの両親の顔を思い出します。きっと、私が思っていた以上に普段の私の様子を見ていたのでしょう。

それに緑川さんとお話をしました。緑川さんは相手の隙を突くことでコミュニケーションをとろうとする人です。今日たまたま居眠りしたのをきっかけに話しかけてくれましたが、それはつまり、私を普段から見ていたということでしょう。

私は、独りぼっちだったのでしょうか？

そう、思い込んでいただけだったのではないのでしょうか？

無知は時として罪になると言うならば、私は重罪人なのかもしれません。

一人で殻に閉じこもることで誰も傷つけることはない、そう思っていたのは……私の、罪？

そうです、簡単です。苛ついていた原因は、私自身が不甲斐ないからです。

優しい様子で目を細めて私を見ながら、アオオニさんは続けました。

「ああ、まったく……。僕はいつでも泣く鬼には弱いんだよ。仕方がない、仕方がないよな！。ちょっとだけ、ほんの少しか本気で仲間になりたいと思ったけど……。半人半鬼なら、鬼に引きずることもできると思ったし、この調子でいけばたぶんできたらうけど。やっぱり、君に鬼は似合わないよ、アカオニくん」

独り言のようにぶつぶつと何事かを呟かれながら。
すっ、とアオオニさんに目尻を拭われました。

どきどきシチュエーションです。この場面を網膜に焼き付けるべく眼を開きますが、視界が歪んで世界が霞んでいます。

ああ……泣いてるんですね、私は。

今、気がつきました。

「あの……どうして、私は泣いてるのでしょうか？」

「それを僕に聞くのかい？ 答えられるのなら応えたいところだけど、残念ながら無理だよ。僕は、鬼だからね。真正正銘、掛け値なし、純度百パーセントの鬼だから……。そうだ、泣いた赤鬼って話、知ってるかい？」

私は黙って頷きました。

人間と友達になりたい赤鬼くんのために青鬼くんが憎まれ役を買って出て一件落着、かと思いきや青鬼くんは独りぼっちでどこかに旅に出て、それを悲しんだ赤鬼くんがわんわんと泣くことで終わる話だったと思います。

「あの話はね、実話なんだ。もちろん青鬼は、この僕。多少脚色をされてる部分はあるし、ノンフィクションと言うべきじゃないけど、おおむねあんなことが大昔にあったのは本当さ」

「……………いやいや、それはどうなんでしょう？」

突拍子もない話でツツコミも冴えません。

記憶違いじゃなければ、そんな古い創作でもなかった気がするんですが。

いや、これはアオオニさんの設定なのかもしれません。アオオニさんがアオオニさんを演じる上での設定だとしたら、突っ込むのは野暮というものでしょう。

「まあ、信じられないならそれでもいいか」

アオオニさんはさして気分を害した様子もなく話を続けます。

「鬼はね、泣かないんだ」

「いきなり話を否定してませんか！」

「そんなことないさ。お話の最後にあるように、赤鬼くんは泣いた。そして、鬼から人になったんだ。独りぼっちじゃなくなった赤鬼く

んは人になり、独りぼつちで旅に出た青鬼はやっぱり鬼のままなんだ」

口角をにやりと上げてシニカルな笑みを作っていますが、そのアオオ二さんの顔がなぜか悲しそうに見えたのは気のせいでしょうか。鬼は、独りぼつち。

青鬼くんは、アオオ二さんは、独りぼつちなのでしょう。そして、私は……。

「泣いた鬼の、泣いた半人半鬼の私は、人になれたんでしょうか？」
「……すぐになれるさ。けど、一つ謝らないといけないことがあるんだけど、ここに長居したら鬼になるよ。いやあ、ごめんごめん」
「鬼に、なる……。そういえば疑問だったんですが、ここはどこですか？」

鬼々骨駅から結構な距離を歩いています。けれど、世界は依然として停止しています。

人が、他者が、不確かな自己を外部から補強してくれる確固なはずの世界そのものがあまりにも希薄な、ここはどこなのでしょう？
「本当にごめんね。うん、反省してる」

「いや、謝るまえに教えて下さい。ここは、どこですか？」

「ここは……どう説明したらいいんだろうな」

青い髪をぼりぼりと掻きながら、アオオ二さんは困った顔をしています。言いたいことはあるのに適切な言葉が見つからない様子です。

「……鬼の世界、と言うべきなのかな」

「ここが、鬼の……？」

「だから、ここに長居したら、鬼になっちゃうんだ。一度鬼になったら、真正銘、掛け値なし、純度百パーセントの僕みたいな鬼になると、人間に戻ることはできない……。いやあ、鬼の世界と言うより僕の世界かな？ だから、悪いのは僕なだけだね、ははは」

軽快な笑い声は、ともすると薄情に聞こえますが、私は嫌な気持ちになりませんでした。アオオ二さんが心では笑っていないことく

らい、鈍い私にもわかります。

人の温もりを感じない、時間を冷凍保存したような、そんな悲しい世界。

どうして私がここにいいのかも聞きたくなりましたが、聞きませんでした。

こんな超常現象のような現代科学と相容れない状況を生み出した術を聞いてもわからないかもしれないし、ここが鬼の世界、ここがアオオ二さんの世界だとしたら理由はなんとなく想像がついたからです。

「……アカオ二くんは、どうしてこんな奇妙な場所に、こんなつまらない孤独な世界に自分がいるのか、聞かないのかい？ 目の前にその犯人がいるのに」

「犯人ではありません。『芥川龍之介の桃太郎』の管理人であるアオオ二さんです。そして今日はオフ会だから、私はここにいます」

私は、なるべく笑顔で、即答しました。

あまり笑い慣れてないのでうまくいったかわかりませんが、この場合は笑った方がいいと思ったのです。もちろん、オフ会だからここにいますというのは事実です。アオオ二さんが求めている答えとズレていることはわかっていますが、これでいいのです。

眉唾もいいところですし、アオオ二さんが真正銘の鬼なのかはわかりませんが、もし仮に本当にここが鬼の世界であるならば……もしここに独りぼっちで生きていかなければならないとしたら……。

それは、とても寂しいことです。

それは、きつと耐えられない孤独です。

たとえ、鬼だとしても、鬼だから仕方ないと自分に言い聞かせても、誰かを、他者を誘いたくなる気持ちを否定することは私にはできません。

「そうか……本当に、アカオ二くんは優しいね。惚れそうだよ」

「惚れそう、ですか」

顔面に血液が集中するのを自覚して、とつさに顔を下げます。

なんだか自然に会話してしまっていました。相手はあのアオオ二さんなのです。長身でイケメンで髪が青いのが目立ちすぎますがどこか影のあるところも素敵な、あのアオオ二さんに惚れそうだと言わしめてしまったのです。

「アカオ二くん……目を瞑ってくれないかな」

「ふへえッ!? いや、その、いきなりですか? いろいろと心の準備というものも必要だったりなかったりしたりしなかったりしたり顔だったりするんですが」

混乱して意味不明です。

目を瞑って何をするのか、そんなの愚問でしょう。

二人きり（正確には他の参加者さんたちもいますが）で男性が女性に目を瞑ることを要求して、そのあとするのは……。

これはチャンスなのでしようが、急すぎです。会って間もない男女がその、キ、キス、なんて、アオオ二さんとなら、嫌じゃないですけど……。

「いきなりで申し訳ないけど、時間があんまりないからね。目を瞑って、十秒数えてくれないかな?」

「あ……ああ、その、は、はい。わかり、ました」
私も女です。

ここは覚悟を決めましょう。

十秒数えるというのはあまり漫画やアニメになかった条件ですけど、最近流行の演出なのかもしれません。十秒数えてと言われたのに残り二秒くらいで不意打ち気味に、なんてドッキリ演出の可能性も否定できません。ときどき。

一世一代の大勝負のつもりで、きつく、ぎゅっと目を瞑ります。

「十……九……八……」

ゆっくりとカウントします。

「七……六……五……」

「よーし、みんなー……」

アオオ二さんが何事が言ってますが、はつきり聞こえません。
みんなとは他の参加者でしょうか？ みんな、ここは僕たち二人
きりにしてくれないか。なんて、そんな素敵な提案かもしれませ
ん。
ときどき。

「四……三……二……一……」

神経を張り詰めます。

周りの気配が薄くなったような気がします。本当に、他の参加者
がいなくなったのかもしれませんが。

まるで、この場に私だけがいるような……。

はて、それはおかしくないですか？

「一……零……！」

目を、開けます。

そこには、誰もいませんでした。

誰も、いない？

アオオ二さんも含め、誰もいなくなってしまったのです。

「あの一」

きよろきよろ見回すと、みんな一斉に背中を向けて逃げているの
が見えました。

青い髪のひよろりとした青年、つまりアオオ二さんもです。

「あの一、アオオ二さん！」

大きな声で呼びかけると、アオオ二さんはくるりと私に向き直り、
通りの向こうから大声で答えてくれました。

「どうしたんだい、アカオ二くん！ 早くみんなを追わないと！

これは鬼ごっこだよー！ アカオ二くんは、鬼ごっここの鬼だよー

！」

「はあぁっ！？ いったい、どういうことなんですか？」

「へ？ だつて目を瞑って十秒数えるなんて鬼ごっここの鬼以外にな
いでしょー？」

そう言つて、楽しそうに逃走を再開するアオオ二さん。

アオオ二さんの中では、「目を瞑って十秒数えて」イコール「こ

れから鬼ごっこをしよう。鬼は君だよ」という意味なのでしょう。そんな意識が通じる相手がこの世界にどのくらいいるのでしょうか。「……………本気で、怒ったかもしれません」

私はこのとき鬼になったのでした。いや、鬼など生温い。私は、修羅になったのです。けけけ、一人残らず食べてやるのです。アオオニさんの骨の髄までスぺアリブにして堪能してやるのです。ゴヤのサトウルヌスを彷彿とさせるシルエットに今こそ変身を…………。

嘘です。嘘ですけど、無性に悔しくて腹立たしくて、鬼気迫る勢いで私は走り出したのでした。

一人目は簡単に捕まえました。

最初から逃げる気がなかったのか、呆と立ち尽くしています。

眼鏡をかけている、いかにも無気力ニートを絵に描いたような、若い男です。

「……はああ……僕には関係ないけどね……人は人……自分は自分……はあ……みんなが逃げたからって僕が逃げる理由にはならないよね……どうせ僕は体力ないし……走って逃げても一番最初に捕まったに違いないよ……はあ……」

私がタッチする直前、男は心底どうでも良さそうにぼそぼそ呟いていました。そこはかとなく気持ち悪いです。けれど、これでこの人が鬼になる。鬼ごっこというのはタッチしたら鬼が交替するのが常ですから。些細なローカルルールがあっても、ここは揺るがないでしょう。

「捕まえました。これで………え？」

そう、思っていました。

これで、鬼じゃなくなっていました。

「……この場合は、どうすればいいんでしょう？」

困り果てたことに、私がタッチすると男は消えてしまいました。

跡形もなく。霧のように。私の掌に吸い込まれるように。

消えたのです。

それと同時に、胸が少し苦しくなりました。心臓という針山にまち針を一本刺したような、ちっぴけですが確実な異物感があります。人は人、自分は自分と眼鏡の男は言っていました。確かにそうですが、それを理由に無気力になったり、始める前から結果を決めてはいけません。客観的に考えればとても簡単なことですが、けれど……。

頭が痛いです。

どうも一筋縄ではいかなそうです。だからといって、ここで止まるわけにはいきません。二筋縄でも三筋縄でも、鬼ごっこは続けねばなりません。

理由はわかりません。まだ。

二人目は、スーツを着たオジサンでした。

息も絶え絶え、車の通る心配のない交差点の真ん中で立ち止まっていました。

「やはり、駄目か……。若さには敵わないな、若さには。いくら私が努力しても、才能ある若者には勝てないよ。いいよな、君は。まだ何にでもなれる可能性があるもんな。それに比べて私は……正直、羨ましいよ君のことが」

「……オジサンは」

私は、対話を試みました。

まるで自分自身に言い聞かせるように、鬼ごっこを忘れて、話しかけました。

「オジサンは変われないんですか？　なりたい自分、強い自分に変われないんですか？」

「無理だろうね」

「どうしてです！」

「……無理だろうね」

会話が成立しません。オジサンの「無理」には理由がないのかもしれません。

ともかく、交差点の真ん中で言う台詞じゃないと思いました。まだ、オジサンはどこへでも好きなように行けるじゃないですか。

最初の一步さえ踏み出せば、簡単です。

最初の一步というのが如何に困難か、私も知ってるというのに強気な発言です。

私という人間は、他人には厳しく自分には甘い人間だったのです。ようか。鬼です。鬼畜です。この発見は結構本気でショックだったります。

なら……だからこそ、この鬼ごっこには意味があります。

「捕まえました……ああ、やっぱり、消えるんですね」

触れると同時にオジサンはいなくなりました。いつから私は人間掃除機になってしまったのでしょうか。針山の針が、一本増えます。

時が凍った世界の、他人の微熱すら感じない孤独な世界の、何かを象徴するようなスクランブル交差点で、私はしばらく呆然と立ち尽くしました。

頭が、痛くなります。

ここは、鬼の世界。

独りぼっちです。

ある意味、ラクなのかもしれません。

究極の引きこもりの完成です。

誰とも交わらず、誰とも混ざらず。

私が個室と呼ぶ、あるいは中二病っぽく、自我を強化し世界と隔絶した絶対空間と呼ぶものの強化版です。

あれ？ 理想の世界じゃないですか？

どうせ、私なんて変わりたいと思っても思うだけで、実際には変わることもなんて無理なんですから。無理なものは無理です。理由なんて考えなくても、始めるまえから無理なのは確定的に明らかなのです。

「って……本当に、私は自分に甘いんですね」

溜め息をついて。

私は最初の一步を踏み出しました。

鈍い頭痛に耐えながら。

鬼ごっこを続けなければいけません。

まだ、私が鬼なのですから。

三人目と四人目は公園の広場にいました。

「これは……とてもアブノーマルです」

遊具がブランコしかない寂しい公園で、脂汗をかいた肥満男が化粧の濃い気の強そうな女に傳っていました。一目で主従関係が明ら

かです。というより、完全にあつちの方向性の主従関係です。

「この豚野郎ッ！ キシヨインだよッ！」

「ひーっ！ 酷い！ 酷く……………いい
いいのかよ！」

思いきりツツコミたいところですが、あの肥満男には逆効果でしょう。かえって喜ばれて泥沼化すること確実です。

派手な女は仁王立ちでふんぞり返っています。とても偉そうです。まるで世界の中心は私というジエスチャをしてるみたいです。

肥満男は土下座するような格好で女を見上げながら、やはりニヤニヤしています。

「もしか、あの角度なら…………。」

「フヒヒ……………黒」

「死ねッ！」

果たして「死ね」と言っただのは私でしょうか若い女でしょうか。たぶん、私じゃないでしょうが（私ならせめて「生まれ変わって下さい」でしょう。それでも酷い物言いです）、とにかく何かを叫んだのは事実のようです。

二人は私に気がついたらしく、顔を向けます。

「あなた、誰よ？ ……ああ、鬼だったわね」

「フヒッ、女の子だ。現役女子高生の鬼っ子だ」

二人は私が鬼だと気づいても、逃げる様子がありません。もはや鬼ごっここのルールを忘れてるのかもしれない。

「鬼っ子ちゃんの格好可愛いね」

「はあ……………どうも」

肥満男が四つん這いのまま私の方にゴキブリよろしくな動きで近付いてきます。他人に可愛いねと言われ慣れていませんが、まったくドキドキしません。むしろムカムカします。

もし、アオオ二さんに「可愛いね」と言われたら…………。想像するだけでドキドキです。

やはり、人間は（鬼もそうですが）見た目も重要だと痛感しまし

た。南無。

「赤いスカジャンに黒いミニスカートにブーツ、そのアンバランスでエッジな組み合わせと、黒く凛々しいショート髪と涼しげな瞳が醸し出すアンニュイな印象、攻撃的な格好と触れれば壊れそうな内面が作り出すパラドックス萌え……………いい！　すごくいい！」

「……どうも」
気持ち悪いのですが、誉められること自体には悪い気はしません。特に緑川さんと一緒に選んだ服が誉められるのは、誉めてくれる相手こそ心外ですが、嬉しかったです。

「ちょ、ちよつと！　豚野郎のくせに私よりそっちの鬼を選ぶの！」
「フヒヒ……オバサンより女子高生、中古より新品だよ、サーセン」
「な、なんですって！　きいいいいいッ！」

ぴきん、と音が出そうなほど血管を浮き立たせながら若い女は金切り声を上げました。

「あんた！」

「私、ですか？」

派手な女は私を指差しながら、ずんずんと近付いてきます。どうやら怒りの矛先は私に向いたようです。白雪姫に林檎を食べさせる魔女のような顔をしています。常に自分が一番じゃなきゃ気に入らない様子です。

「あんたより私の方が綺麗じゃない！　どうして私が一番じゃないのよ！」

「それは、その、好みの問題かもしれませんが……全く自慢じやありませんが、私はソツチ方面の男の人には好まれる傾向があるようなのです」

これは嘘ではありません。

関心がなかったので詳細は覚えていませんが、内向的あるいは自己完結的ともいえる趣味をもつ人たちに限って人気があるのです。私をアニメかゲームのキャラと勘違いしてたのでしょうか。元キャラを知りたいような知りたくないような、複雑な心境です。

なおも納得のいかない顔で、派手な女は私の胸ぐらを掴みました。
「どうして！ 私は、私が特別じゃなきゃ嫌なの！ その他大勢じゃない、みんなが認める崇める存在じゃなきゃ！ どうして！ どうして……」

「落ち着いて下さい……あっ」

派手な女の身体を離そうと手が触れた瞬間、やはり影も形もなく消えてしまいました。

針山の針が、また一本。

「あーあ、消えちゃったね」

肥満男の呟きに、私は目を向けず応えます。

「そう、ですね」

「漏れみたいな便所虫は社会から消えても誰も気づかないところかむしろ世のため人のためになるのに、中古とはいえそこそこ綺麗な女の人が消えるなんて、フヒ、サーセン」

ふと、視線を遣ると、肥満男がニヤニヤしてるのに気がつきまして。

土下座するようなあの角度なら……。

「フヒヒ………白」

「二度死ねッ！」

咄嗟に出たのは「生まれ変わって下さい」ではなく「二度死ね」でした。

そして、思わず、蹴ってしまいました。

人生で初の暴力を振るった相手は、どういうわけか少し嬉しそうな顔をしながら、消えていきました。手以外の接触もカウントされる武闘派鬼ごっこです。これで一気に針が二本増えました。

なんとなく、針のからくりには気づいてます……。

私はこう見えて頭の回る方ですから。

そうです。天才肌と言っても過言じゃありません。きっと神さまに選ばれた特別な存在なのです。

学校の勉強でわからないところはあります。一度、五教科全て

のテストで満点をとつたら、次の期末が明らかに難易度が高くなつてしまい同級生に非難の目を浴びせられたことがあります。それ以来、たまにわざと間違えたりするくらいです。

授業中ノートを一生懸命とるのは、そうでもしないと示しがつかないからです。居眠りなんかして百点だったら顰蹙ものです。これも経験から学びました。世間体を考える天才肌なのです。

だから、他人が私のことを理解してくれないとしたら、それは相手が悪いのであつて私には非がありません。

嘘です。私みたいな使所虫のことを、日々を楽しく過ごしてらっしゃる他の皆様に理解できるはずありませんし、理解する必要もありません。勉強しか能のない暗く妄想好きな人間失格を擬人化した私は、ひっそりと消えるか死ぬかを選択した方がいいのかもしれない。

友達も……いません。一瞬だけ緑川さんの顔が浮かびましたが、彼女はクラス委員長としての同情から気まぐれで声をかけていただけ。可能性を否定できません。私は虫、私は鬼、所詮は人と相容れない存在なのです。

だから、他人が私のことを理解してくれないとしたら、それは私が悪いのであつて相手には非がありません。

自尊心と劣等感がない交ぜになったマーブル模様が、頭の中をぐるぐる回っています。

まるで、ルビンの壺のようです。

自尊心に目を向けると劣等感が地になり、劣等感に目を向けると自尊心が地になる。そんなトリックアートを強引に見せられてる感じです。

「もしくは……これは、ただの鏡なのかもしれません」

四本の針を心の臓に刺したまま、私は鬼ごっこを続けます。

誰か、私以外の誰かがいれば、この頭痛は治まる。そんな確信があるのです。我思うループを脱するには、他者の存在しかありません。

たとえそれが、幻であったとしても、今の私には必要です。

私は走りました。

孤独から逃れるように。

どこまで行っても他者の温もりを、その空気を含む微かな微熱さえ殺してしまったような、閉ざされた悲しい世界で、私は……。

これが、私の求めていた理想郷なのでしょうか？

アオオニさんは、私のメシアなのでしょうか？

「……わかりません。けれど、たぶん、私が求めているのは、もっと……」

息も切れ、頭痛も耐えられなくなってきた頃、やっと見つけた。

五人目は、あの半ズボンを履いた小学生くらいの男の子でした。

車の影すら見えない横断歩道で、律儀にも手を上げて渡っています。滑稽なほど素直です。

「あつ！ 鬼だ！」

私の姿を見つけるなり、全速力で逃げていきました。

私も走ります。逃げられたら追いたくなるというのは本当です。

初めて鬼ごっこらしくなりました。

「待ちなさい！」

気分を出すために言ってみます。

「わかった！」

元気のいい声で応えて、少年は止まりました。

素直です。素直すぎです。

桜の枝を折ったらずく謝るタイプなのは賞賛に値しますが、時と場合によると思います。

「あの、どうして止まるんですか？」

「え？　だって、お姉ちゃんが待ちなさいって言ったから」

「けれど、鬼ごっこなので逃げてもらわなければ困ります」

「どうして、困るの？」

「それは……」

「どうしてでしょう？　鬼としては、一刻も早く捕まえた方がいいに決まっています。そういうゲームなのですから。たとえ、触れれば消えてしまう相手だとしても。」

「お姉ちゃんは、鬼なんでしょ？　ボクを捕まえるんでしょう？　どうして、鬼は鬼じゃない人を追うのかな？」

「それは……悲しいからです、たぶん」

ふと口を出た言葉に、私も驚きました。

悲しい？　鬼が？　それとも私が？

「どうして、悲しいのに逃げてもらわなければ困るの？」

「……ゲームだからです」

「どうして、そういうゲームなの？」

「それは……」

「鬼は、怖い？　人と触れ合いたいのに、人に触れるのが怖いのか？」

「そう、かもしれません」

「じゃあ、鬼は結局どうしたいの？　お姉ちゃんは結局どうしたいの？　このままでいいの？　ボクは一体、どうすればいいの？　逃げればいいのか？　捕まればいいのか？」

「私は……どうしたいのでしょうか？」

「どうして、どうしたいのかわからないの？」

この少年は、素直です。

なんにでも疑問をもって、理由を求めて、終わらない問いを続けて、まるで、私自身が果てのない自問自答をして、アオオ二さん風

に表現するなら我思うループに陥ってるような、そんな感覚です。

ああ、そうなのです。

この鬼ごっこは、最初から。

「私とアオオ二さん、二人だけだったのです。だから、私はアオオ二さんを探します」「じゃあ、ボクはどうすればいいの？」

私は、少年の頭に手を載せました。

「とつとと私に戻って下さい、素直で愚直な私」

少年は、消えました。いいえ、正確には消えたのではなく戻ったのです。私の中に。こうして、針山の針が一本増えます。

私は、寂しいのです。

私は、怖いのです。

そうです……私は鬼ですから。自意識過剰の鬼ですから。他人にどう見られるのか、どこかおかしいところがないか、気にするあまり人と会話することが苦手になり億劫になり、それでいて寂しがりの鬼ですから。

人っ子一人見当たらない孤独な世界を、私の分身となるオフ会の参加者たちを、アオオ二さんが作り出したのか私が作り出したのか、それともアオオ二さん含め全て私が想像した一人芝居なのか、わかりません。

お芝居だったら、観客はいるのでしょうか？

私が右往左往してるのを、どこかでポップコーンを片手に見て笑ってるのでしょうか？

そんな映画を見たこともありますが、特に驚きも感動もしませんでした。

なんせ、私は小さい頃からそんな妄想に取り憑かれてましたから私は、誰なのでしょうか？ 本当に両親の子どもなののでしょうか？ 実は私以外の人間は既に宇宙人と入れ替わっていて、私という人間を影で観察してるのではないのでしょうか？ 世界に私以外は存在せず、この私の脳だけが水槽の中でプカプカと浮かんで夢見てるだけなのではないのでしょうか？

小学校に入学するまえから、私はこんなことを独りで考えては恐怖していました。

だから、他者が必要ないと孤独を選んだのでしょうか？ この世界は、やはり私にとっての理想郷なのでしょうか？

「それは……半分本当で半分嘘です」

私は歩き始めました。

頭痛が酷くなったからです。

この頭痛は、誰かを必要としてる私の半分が訴えているのです。誰かを捕まえろ、誰かに心を開け、もっと自分をさらけ出せと訴えているのです。

私の半分は、この孤独な世界から一刻も早く出たがっているのです。いいえ、半分以上の私が、もう気づいているのです。この世界が行き止まりだということを。ここにいたら先がないということを。コンビニで六人目を発見しました。中学生くらいの制服姿の女の子です。

漫画雑誌を一人で立ち読みしながらニヤニヤしています。

こちらには気づいてなかったようなので、私は声をかけず後ろから肩を叩きました。ちよつと反則っぽいですが、私は早くアオオ二さんを追いたいです。そのためには、私はしっかりと私でなければなりません。

これで、針山の針は六本です。

なんとなく、女の子が読んでいた雑誌を手に取りました。予想がつかなかったと言えば嘘になりますが、私の好きな漫画雑誌です。

不思議なことに、随分と古いバックナンバーです。

棚を見ると、私が読んでいたお気に入りの雑誌や漫画本が所狭しと並んでいます。コンビニなのにおかしいなと思いつつ、ついつい手が伸びてしまいました。

「あつ、これ懐かしい」

好きな漫画に囲まれて、読まない理由はありません。しばし時間を忘れて読みふけることにします。

お店の人に悪いかなと思わなくもなかったですが、飲み物やお菓子も頂きながら漫画三昧です。誰もいないこの世界だからこそできる贅沢です。夜更かしを咎める親もいないのですから。

あれ？　ここは案外に理想郷かもしれません。

そういえば、あの頭痛も治まりました。

現実から目を背け妄想の世界に逃げ込むことで、頭痛を回避できるのでしょうか。そうだったら、このコンビニに引き籠もることもやぶさかではないです。

妄想は優しいです、いつでも。

どんな卑屈になっても、どんな自分が嫌いになっても、想像の翼一つで私はスーパーガールです。完璧に完成した完結な世界で、私は自分とは似ても似つかぬ、あるいはどこか似た登場人物に自分を投影し、現実では叶えられない大冒険に心躍らせるのです。

ふと、漫画から目を上げました。

高校生くらいの女の子がいました。

漫画雑誌を一人で立ち読みしながらニヤニヤしています。

コンビニのガラスに映った、私です。

「……とても、自己嫌悪です」

途端に、頭痛がやってきました。

私は脇目も触れずコンビニを走り出て、鬼ごっこを続けました。

あとは、アオオニさんだけです。

アオオニさんも、やはり消えてしまうのでしょうか？　アオオニ

さんこそが、私の七本目の針なのでしょうか？　それとも……。

「はあ……くっ……」

日頃の運動不足がたたり、すぐに息が切れてしまいました。けれど、足を止めるわけにはいきません。私は鬼ですから。私は弱いのですから。この足を一度止めたら、たぶんもう動けなくなります。この誰もいない寂しい世界こそが、安住の地であると本気で考えたくもなります。

アオオ二さんと二人なのか、それとも、どう足掻いてもここは私独りぼっちの妄想ワールドなのかわかりませんが、とにかく行き止まりなのです。

行き止まりでは、前に進むことはできません。

そうです、私は、変わりたいのです。

緑川さんは癖のある性格をしています。なんだか友達になれそうなのがします。お互い不器用で、本気で付き合おうとすればするほどすれ違いが多そうですが、それも悪くありません。そういったすれ違いこそ、いかにも友達っぽいじゃないですか。

両親にはとても心配をかけているようです。心配をかけないために成績を良くしてる、なんてことはとうの昔にお見通しなのでしよう。友達の家泊まると言った嘘は、嬉しさのあまり見抜けなかったのかもしれませんが。私は、親不孝娘です。だからこそ、これから自律して一人前になりたいのです。変わりたいのです。

「私は……私はッ！」

走ります。

車のない幹線道路を。

公園の広場を。

学校の前を。

体中にべったりと汗をかき、呼吸音がかしいほど息を荒げ、私は探しました。アオオ二さんを、いえ、誰でもいいのです。緑川

さんでも両親でも名前の知らないクラスメイトでも、私の存在を許してくれる他者さえいれば。

鬼ごっこの鬼は、寂しいから人を追うのだということを、実感しました。誰かに触りたい一心で、逃げる人を追うのです。

「私は……ッ」

ここ一ヶ月の運動量を足し合わせたようなマラソンで、私の足は棒になりそうでした。

走れなければ、歩くしかありません。

ブーツで走るというのも無謀だったな、と今更思いました。私は緑川さんと選んだ勝負服を着ているのです。ミニスカートだったので走つてるときお見苦しいものをチラつかせたかもしれませんが、見てる人がいないのが幸いです。

無我夢中で走って辿り着いたのは、集合場所である鬼々骨駅前でした。

オフ会で集まったのは、結局私だけだったのでしょうか。そもそも、アオオ二さんのサイトすら私が妄想したものでしょうか。

孤独な自分を鬼だと自称し、中二病全開で多重人格運営サイトでもしてたのでしょうか。

疑問は尽きませんが、そんなことより、私は……。

私は、いじけるのを止めます。

「私はッ、私は人間です！ 私は、鬼なんかになりたくありません！ 弱いですし、甘いですし、臆病ですし、自分勝手ですし、その他諸々ダメダメですけど、鬼は嫌です！ 独りぼっちは嫌です！ だから、だから……。早くアオオ二さん、ここから、出して下さいッ！」

生まれて初めてお腹の底から声を出し、私は足を止めました。

もう一歩も動けそうにありません。タイムリミットがあるならばお手上げです。

けれど、アオオ二さんは来ると確信していました。

今の私は……。

「やれやれ、本当に僕は……」

後ろから誰かが近付いてきます。

「本当に僕は、今も昔も泣く鬼には弱いんだよ」

今の私は、顔がぐちゃぐちゃになるほど泣いていたのでした。それでアオオ二さんが現れない道理がありません。振り向くと、青い髪をポリポリ掻きながら歩いているアオオ二さんがいました。

「このままこっそり隠れてタイムアップ狙いでアカオ二くんを鬼にしようかと欲が出たけど、やっぱりナシだ。アカオ二くんは、鬼ではなくて人間になるべきなんだ。やっぱりね。僕みたいに生まれながらの鬼とは違うんだから」

「あの……」

私は、どうしても聞かなければなりませんでした。

「あの、アオオ二さんは……私、ですか？」

「ははは、面白い質問だねアカオ二くん。僕は、アオオ二だよ。アカオ二くんじゃあない。ただの……しがない本物の鬼さ」

アオオ二さんは快活に笑いながら答えました。

その笑顔はあまりにも透き通っていて曇りのないものでしたが、アオオ二さんが心の底から笑っていると思えるほど私もおめでたくはありません。

私も、やはり鬼の端くれなのですから。気持ちはわかるのです。どんなに強がっても、どんなに孤独を愛しても、どんなに否定しなくても。

寂しいのです、私たちは。

「アオオ二さんは、逃げないんですか？ これは鬼ごっこですよ？ さっきみたいに隠れて逃げ切ってタイムアウト勝ちを狙うのが、むしろ正々堂々の勝負なのではありませんか？ そうしたら……」

「そうしたら、アカオ二くんが本物の鬼になってしまうよ」

「それは……嫌です」

「だろ？ 僕は自分をこれ以上嫌いになりたくないんだよ」

「けど、私が鬼になれば、鬼は二人です。二人なら、独りではあり

ません。きっとそれは、鬼じゃ、ありません。鬼だけど、鬼じゃなくて、その、きっと新しい何かです。シミュレーションゲームにおける黄色いユニット的な第三勢力になれるはずです」

「アカオニくん、気持ちは嬉しいけど、言ってることがめちゃくちゃだよ」

自分でも支離滅裂なことを言ってる自覚はあります。

けど、このまま私が元の世界に戻って終わるのは、違うと思ったのです。私の人生の物語において、演出脚本主演すべてをオールマイティにこなす私の生き方において、ただ鬼から人になってオシマイにしたくないという思いが強くなってきました。

きつと、私は変わりつつある。

緑川さんと話して、両親に心配をかけてたのに気付いて、自分自身の嫌な鬼と向かい合って、そして、アカオニさんと出逢って。

この前兆を逃したくありません。間違ってBボタン連打して進化をキャンセルするなんて言語道断。私は、私は……もう、袋小路から抜け出したい！ できることなら、アカオニさんと一緒に！

私はアカオニさんへ近付きます。

一步、さらに一步。

軽く手を伸ばせば届くような距離まで近付いて、私は軽く顎を上げてアカオニさんを見上げます。

しばらく見つめ合う格好になります。どきどき。動悸が激しいのは走り続けたからだけではありません。これを恋と呼べるかわかりませんが、同情なんて言葉で片付けたくない何かしらがあります。

さきに目を逸らしたのは、意外にもアカオニさんでした。

「これで、ゲームセットだね。アカオニくんは鬼から人間になって、僕は鬼のまま。いつぞやと同じ出来事をなぞるだけ……。歴史は繰り返す、ってことさ」

「歴史は繰り返す、なんて人間の言葉です。鬼のアカオニさんに当てはまるとは限りません」

私は右手でアカオニさんの左手を掴みます。よし、大丈夫。アカ

オニさんは消えませんでした。あと、もう一息。

とても優しい、けれど、何か諦めたような悟りきった笑顔でアオオニさんは肩をすくめました。

「これで鬼ごっこは終わり……」

「いいえ、まだです」

これが、たった一つの冴えたやり方であることを祈りながら。私は空いてる手で、アオオニさんのもう片方の手を握りました。

私の行動の意図がわからなかったのか、アオオニさんは苦笑いしています。

「アカオニくん、別に両手で触っても僕は消えたりなんかしないよ。大丈夫、僕は君じゃない。ただの……孤独な鬼だ」

「一人だと、鬼になる。そう、アオオニさん言っていました……」

私は、また泣いていました。泣きながらも、必死にアオオニさんに伝えなければいけません。

格好悪くても、私は、生きたいと思えるようになったんだから。

少しくらい、欲張りにもなります。

「けど、これなら……。二つの手を取り合えば、輪はできるんです……。人という字が支え合ってるのか寄りかかってるのか、私にはわかりません。とにかく、自分以外の誰かが必要だって言うなら……」

泣きながら、顔を真っ赤にしながら、私はアオオニさんにキスをしました。

自分自身でも驚くほど衝動的に、なのに百年もまえから予行練習していたくらい自然に唇を合わせました。ファーストキスは、レモンの味でもママレードの味でもなく、涙で塩辛いだけでした。

ゆっくり顔を離し、それでもお互いの呼吸を肌で感じる距離で、

私は言葉を続けます。

「アオオニさんの誰かに、私になることはできませんか？」

言いました。

一生分の奇跡をここで使ってしまったくらいの確率で、私はども

らずに言いたいことを言い切りました。

けれど、ドラマみたいに格好良くはありません。鏡で見るともなく、私の顔は涙や鼻汁でぐちゃぐちゃで、衝動的なファーストキスで夜道を照らすほど赤くなってることは確実です。

これで、いいのです。

今の私は、どうしようもなく生きてる実感があります。

もう、便所虫だなんて卑下しません。

もう、独りが悲しいと正直に言ってしまうです。

もう、自分にも他人にも悲しい嘘はつきたくありません。

親に心配しないで大丈夫と言いたいです。緑川さんに友達になつてほしいと言いたいです。アオオ二さんには……言いたいことの半分くらいは言えました。

アオオ二さんは、呆氣にとられた表情で三秒ほど固まってから、天を仰ぎ。

「あー、まったく。これじゃあ……っ」

しゃくり上げるような声を飲み込みながら、そのままポスンと私の肩に顔を乗せました。泣くのを、どうにかこうにか堪えてるのでしょうか。まるで小さい男の子が、ただ意地を張るためだけに無理をしてるみたいに。

アオオ二さんの鼻が、私の鎖骨と肩の合間にあるへっこみにぴたりとはまります。

頭一個分はアオオ二さんの方が背が高いのに、今ではこんなにも重なっています。

冷静になれば顔から火が出るくらいなシチュエーションですが、はじらい中枢は少しまえから麻痺しています。

ああ、なるほど。

なんだか、ふと実感しました。

生きる重みを誰かに預けること、それが、人間の定めなのです。

一人きりだと鬼です。

誰かに触れたいのに、同時に触れるのをどこかで避けている、鬼

ごっこの鬼です。

家族でも友人でも恋人でも、自分の重みを預けられるような誰かが、人間には必要なのです。なら、アオオ二さんも……。

もう一押し、気の利いた言葉をかけなければ。

そう思うのですが、何も思い浮かびません。

だから代わりに、私はぎゅっと、アオオ二さんを抱きしめました。うまく言葉にできなくても、私はここにいるということを、アオオ二さんにわかってもらいたかったのです。

腕の中のアオオ二さんは、生まれたての子鹿のように震え出ししました。

そして。

「あああああああーっ！」

天まで届くような大声を上げました。

それは、産声のよう。

「あああああああーっ！」

私も真似してお腹の底から声を上げました。そうです。アオオ二さんも、そして、私も。新しく生まれ変わるのです。ふて腐れるのは、もう止めます。こんな行き止まりには、未来がありません。こんな心配事も厄介こともない世界には、未練ありません。

「えっ……」

目が眩むほどの光が空から差し込んできました。

ステンドグラスのように光を鮮やかに透過しながら、空の欠片が雪のように降りてきます。

きっと、この世界は壊れたのです。

鬼の世界は、これきりです。

私はアオオ二さんを離さないように腕に力を入れ直し、強く、強く目を閉じました。

EPILOGUE - 1

私の眠りを覚ましたのは、王子様の接吻ではなく目覚まし時計のベルでした。

いつも通りの自分の部屋。

いつも通りの水玉のパジャマ。

これは……これは見覚えのある展開です。物語の禁じ手の一つと言われる、けれど、一部のギャグマンガではむしろ王道かもしれないという、アノ……。

「……はあ。まさか、夢オチなんですか？」

芋虫のようにベッドからどうにか這い出ると、いつもよりちょっとだけ乱暴に目覚ましを止めました。

本当に、あれは夢だったのでしょうか。

記憶は、あります。

アオオニさんのオフ会に行つて、誰もいない寂しい世界で心細くなつて、なんだかわからないまま鬼ごっこをして、触ったらみんな消えちゃつて、アオオニさんとなんだかいい雰囲気になったと思つたら、空がなくなつて今に至るわけです。

はい、現実的に考えたら夢以外の何物でもありませんね。特に、私みたいな女がアオオニさんみたいなイケメンといい雰囲気になるところが。孤独な世界とか人が消えたりとか空が割れたりよりもフアンタジイです。

予感めいたモノを感じながら私はPCを立ち上げて『芥川龍之介の河童』にアクセスします。画面には虚しく『404 File Not Found』とエラーが出ました。

タイミングが悪かった可能性もわずかにあるので何度かF5を押して再読み込みしましたが、結果は変わりません。

「困りました……。中二病をこじらせてとてモリアルな妄想を見るようになってしまったのでしょうか。だとしたら……いろいろと末

期です」

アオオ二さんは、私が作り出したオリキャラだったりするのでし
ようか。

私の隠された人格が、私の知らぬ間にホームページを作ったりし
ていたのでしょうか。

もしかしたら、緑川さんすら仮想のクラスメイトだったりしない
でしょうね。不安になって部屋をきよろきよろと見回すと、あの赤
いスカジャンがハンガーに掛かっていました。全く不釣り合いのフ
リフリミニスカートもその下に丁寧に畳んであります。

近付いてみると、スカジャンの左肩だけが不自然に濡れています。
どうしてここだけ濡れてるかなと考えて、思い至りました。

夢じゃなかったのかもしれない確率が、わずかに上がります。

なんだ……アオオ二さん、泣いてたんじゃないですか。

リビングで母親と出くわしました。ちょうど朝食の準備が終わっ
たところのようです。食卓に並べられた赤飯は昨日の残りですか。
そこは是非とも夢で良かったのですが。

「あら、いつの間に帰ってたの？」

「いつの間にか帰っていたのです」

正直に答えると、母親はなぜか嬉しそうに頷くと、私の分の朝食
を用意してくれました。父親はやや気むずかしそうな顔をして

赤飯とにらめっこをしています。

「紅子、ちよつと座りなさい」

「あ、はい」

言われなくても座りますけど、と心の中で軽く愚痴りながらも素
直に座ることにします。赤井紅子という戦隊モノのリーダーも道を
譲るほどレッドな名前を付けた張本人の対面に腰を下ろします。

「あー、そのー、うん……。友達は大切にするんだぞ」

「……はい」

父親は赤飯を見つめながらぼつぼつと語り始めました。

「紅子は、小さい頃から感受性が豊かというか、ちよつと考えすぎるくらいがあるからな。もうちよつと肩の力抜いて、そのー、まあ、友達付き合いをした方がいいと、父さん思っんだ。覚えてるか？ 小学校に入学したばかりのときも……」

それから、父親は珍しく饒舌に、とても懐かしそうにとても愛おしそうに、私の思い出を聞かせてくれました。仕事が忙しくて、私のことなんてさほど興味がないと思っていた父親が、ともすれば私より鮮明に私の思い出を覚えてるなんて驚きです。

きつと、父親にも知らぬ間に心配をかけていたのでしょうか。

それでも、私のことをこんなにも優しい顔で語ってくれるなんて。だからな、友達を大切にするんだぞ」

私は黙って頷いて、俯いたまま赤飯を口に運びます。今、顔を上げることはできません。ああ、この赤飯なかなか塩味がきいてますね。うん。駄目です、本当に。涙もろくなつてしまったようです。涙で、塩辛いです。

「……ごちそうさまです」

席を立ち、けれど、そのままこの空間を去るのはなんだか惜しい気もして私は立ち止まってしまいました。

「どうかしたの？」

母親が気遣わしげに声をかけてくれます。

大きく一回深呼吸をして、私は答えます。

「今度……ウチに友達を連れて来てもいいですか？ お泊まりです」

「……ああ、もちろん」

声を合わして承諾してくれた両親に、またしても涙を溢しそうになりながら、私は早足で学校に向かいました。

EPILOGUE - 2

教室に着くとすぐに、私は緑川さんのところに行きました。善は急げです。

「おはようございます、緑川さん」

「あつ、おはよー」

挨拶もそこそこに、緑川さんは相撲の立ち会いみたいな前傾姿勢をとりながら好奇の目を向けてきました。

「で、で！ 昨日の初勝負はどうだったの？ 勝負服は役に立った？ ねえ、ねえ！」

「ちよ、ちよつと落ち着いてください」

闘牛士よろしく緑川さんの口撃をいなしながら、私はこの勢いを自分に味方にするのにしました。ちよつとの勇気さえあれば、私たちはきつといい友達になれるはずなのです。

「それについての話はプライベートなので、ここでは話したくありません」

「ぶー、赤井さんのケチ！」

口ではそう言っておきながら、緑川さんはどこかホツとしてるように見えるのは気のせいでしょうか。

誰かのプライベートを聞くことは、自分に他者を取り入れるということです。いつか失うかもしれない繋がりを持つことに、緑川さんは怯えてるのではないのでしょうか。私も、そうです。だけど、怯えていたって行き止まりです。その世界は、もう卒業しました。

私は泣いた赤鬼です。

格好悪くても、誰かに頼ったり、時には頼られたりしながら生きたいのです。

私はちよつと勉強ができるだけの、卑屈で無口で友達の少ない、両親に心配をかけまくりでATフィールドで他人を避けてきた泣き虫で臆病な……ただの人間なんです。

それに気づいたら、あとは一步前に進めばいいだけです。

「緑川さん……だから、その、プライベートな話なので、プライベートな場所ですら話すのもやぶさかではないという意味です」

「ん？　どういう意味？」

「だから……あー、今晚、私の家でお泊まりして語り明かしましょうということですよ」

「……えっ？　お泊まりって？」

まるでネッシーが二足歩行してるのを目撃したくらい呆けた顔で、緑川さんは私を見つめています。UMAに見間違えられるのは二回目なので、このくらいでは私も動じません。

「お泊まりは、お泊まりです。私の家に緑川さんを、友達として招待したいのです」

「ともだち？　私なんかが？」

「緑川さんだから、です」

「ともだち……」

噛み締めるように呟きながら、緑川さんは顔を伏せました。

友達。

なんか青臭い響きがあるので今まで使わなかった言葉ですが、口にしてみると案外いいものです。

「緑川さん、友達になりましょう」

「……………」十二分に溜めてから。「うん」

緑川さんは頷きました。そしておずおずと、やや照れた表情で続けます。

「じゃあ、赤井さんのこと、紅子ちゃん、って呼んでいい？」

「え？　ええ、もちろんいいです」

紅子ちゃん、なんて親以外から言われたのは久しぶりかもしれないません。

あまり自分の名前が好きじゃなかったのに、ちょっとだけ好きになれた気がします。

「緑川さんのことは、なんて呼べばいいんですか？」

「うーん、別にそのままでもいいよ」

「それだと不平等です。残念ながら緑川さんのファーストネームを知らないで、教えてくれると嬉しいです」

なぜか躊躇するように、おずおずと緑川さんは答えました。

「……縁結びの縁で、ユカリ……」

「なるほど……」

私とは違う意味で、絶妙な組み合わせの名前です。けれどシンメトリイ的アシンメトリイな字面は、なんとなく緑川さんに合ってる気がします。緑川縁、一度心の中でリハーサルしてから、私は名前を呼びました。

「縁、ちゃん。これで大丈夫でしょうか？」

「うん……。紅子ちゃん。じゃあ、その……本当に今日、紅子ちゃんの家にお邪魔していいの？」

「全然問題ありません。きっと両親も宝くじで一等当たるより大喜びするはずです」

「そんなー、大げさだよー」

本当にそれくらい喜びそうなのが恐いところですが、あとは野となれ山となれです。

「けど楽しみだなー、お泊まり。ねえねえ、お泊まりって何が必要かな？ エチケツト袋はもってった方がいいかな？ 非常食は？」

熊避けの鈴なんかもあった方がいい？ キャリーバッグにすると、逃げるとき大変かな？」

「残念ながらウチは一般的な住宅街にありますから、きっとパジャマや歯ブラシくらいで充分事足りると思います」

「なんか、こういうのいいね」

唐突な、けれどしみじみとした緑川さんの言葉に、私は頷きます。照れ臭いです。

元アカオ二は伊達じゃないってほど、私の顔は赤いことでしょう。というか、乙女みたいに頬を赤らめていたら、本気でそっちの道に行ってしまうそうです。教室内の注目を集めてる気がしないでも

ないですし。薔薇ですか？ 背景は薔薇なんですか？

かける言葉もなく、なんとなしに緑川さん、いえ縁ちゃん見つめ合います。

「……」

「……」

「……」

「……」

「……」

「……ぽっ」

「いえいえ、ぽっ、てなんですか！」

「駄目だよー。ボケるのは私で、紅子ちゃんはツツコミでしょ」

「どこら辺がボケなんですか！？ てか、このやり取り昨日もありましたよね！」

こういつた会話も、思えば友達みたいです。

いえ、みたい、じゃなくてもう友達なのです。

ちよつと勇気を出して一歩踏み込めば、お互いのATフィールドは中和されるのです。そうやって、たまには喧嘩するときもあるかもしれませんが、一歩ずつ一歩ずつ、私たちは友達らしい経験を積み重ねていくんだと思います。

「悪く、ないですね」

「ん？ なにが？」

私が漏らした言葉に、縁ちゃんが反応します。けど、さすがに思ったこと全部伝えるのは憚られるので、要約してしまいます。

「友達って、悪くないなと思っていたところですよ」

「えっ……うん、そうだね。紅子ちゃんって、たまに結構恥ずかしいこと涼しい顔で言うよね」

「そうでしょうか？」

改めて指摘される方が恥ずかしいのですが。

友達。そうです。人は、一人では生きていけないのです。

家族でも、友人でも、その他顔を見たこと知らない人々との繋が

りさえも、きっと私が私であるために必要なのでしょう。だって、私は鬼ではなく人間なのですから。

当たり前で大切なことを教えてくれたアオオニさんが、ここにいないことは残念ですけど、きっと……。

そんなことを私が考えてると、縁ちゃんが、ぱん、と手を一回叩きました。あ、そうだ。忘れてた。のジェスチャだと推測します。

「あ、そうだ。忘れてた」

当たりました、と密かにガッツポーズです。

「何を忘れてたんですか？」

「ふふふつ……聞いて驚け、なんとこんな半端な時期に転校生が来たのだ！」

「転校生？」

なんだか、予感が、いい予感がします。

「クラス委員長として一足先に挨拶したんだけど、なんだかひよろつと背が高くてニヤニヤ笑ってて爽やかな感じの男子だったよー」

「あのっ！ その、髪は、どんなでした？」

私は声が大きくなるのを抑えられませんでした。縁ちゃんはやや顔をしかめて腕を組んで答えてくれました。

「髪？ うーんそれがさ、ありえないくらい髪が青いんだ。校則に染髪の規定はないからいいけど、あんなに派手なのは委員長としてどうかと思って、頭が痛いわけですよ。名前も青井鬼太郎だよ？
なんだか、出来過ぎだよー」

青。

教室の窓の外から見える空も、青。

転校生の髪の色も、そして、アオオニさんの髪の色も……。出来過ぎです。

私は、何に感謝すればいいのでしょうか？ 神？ 髪？

「あれっ？ 紅子ちゃん、顔すごく赤くなってるよ？」
赤。

人間の身体を流れる熱い血潮も、赤。

昨日買ったスカジャンの色も、そして、私の顔の色も……。

深呼吸。

大丈夫。

ツキが回るときは、どんどん攻めていくべきだって漫画にもありました。ギャンブル漫画だった気がしますが、人生にも応用できるはずです。

「唐突ですが、縁ちゃん。やりたいことができました」

「へ？ やりたいことって？」

完全な思いつきですが、素敵な思いつきです。
バンドをやりたい。

まったくの素人ですが、なんだかいいじゃないですか。流行に乗ってみるのも、たまにはいいのだと思える程度に、私は大人になったのです。

私と縁ちゃんと、まだ見ぬ青い髪の転校生。

三人でバンドをやる姿を想像して、私はほくそ笑みます。名前からして、随分とカラフルな組み合わせです。必要なら髪を赤く染めるのも悪くないです。緑よりか現実味があるのが救いです。

昨日、母親に言った嘘を、帳消しにするチャンスです。

新しいことを始めて、自分に挑戦するチャンスです。

私は、きつと、変わります。

エアーギターもどきの動きで縁ちゃんを威嚇します。飛び跳ねます。マイクで歌うフリをします。気分は魅惑の深海パーティーでジョニー・B・グッドをテケテケと弾くマーティです。

「やりたいことって、もしかして……」

マーティみたいな時間旅行はできないけれど、だからこそ、後悔しないよう今を一所懸命生きていこう。

私の、赤井紅子の青春は、今日から始めましょう。

「そうです。ロックンロールです」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9173s/>

百の奇人が夜を行く あるいは現代のオフラインミーティング

2011年5月2日02時25分発行